米国で新しい生活を築く難民たち

アメリカンセンターJapan／アメリカンセンター・レファレンス資料室

米国国務省　2010 年 7 月
第 15 巻　第 7 号

米国国務省国際情報プログラム局

発行責任者	Dawn L. McCall
編集主幹	Jonathan Margolis
出版部長	Michael Jay Friedman
編集長	Mary T. Chunko
副編集長	Nadia Shairzay
プロダクション・マネージャー	Janine Perry
デザイナー	Chloe D. Ellis
写真編集	Maggie Johnson Sliker
表紙デザイン	Min-Chih Yao
レファレンス・スペシャリスト	Anita N. Green

表紙カバー
キューバから移住してきたエスピノサー家。ニューヨークの自宅にて（写真提供　Jay Capers）

Printed in Japan

米国国務省の国際情報プログラム局は、eJournal USA のロゴ名で電子ジャーナルを発行し、米国や国際社会が直面する主要な問題、ならびに米国の社会や価値観、考え方、さまざまな制度について検証しています。

最新号はまず英語で発行され、続いて電子版のフランス語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語版が発行されます。必要に応じてアラビア語、中国語、ペルシア語の翻訳版が発行される場合もあります。ジャーナルはそれぞれ、発行巻数と、号数別に目録に掲載されます。

ジャーナルの中で提示された意見は、必ずしも米国政府の見解や政策を反映するものではありません。米国国務省は、ジャーナルがリンクするインターネット・サイトの内容、およびこれらのサイトへの継続的な利用の可能性について、一切の責任を負いません。各サイトについての責任は、サイトの発行者のみに帰属するものとします。ジャーナルに掲載される記事や写真、イラストは、著作権についての明記がない限り、米国外での複製や翻訳を認めますが、明記があるものについては、ジャーナルに記載されている著作権保有者の許可を得なければなりません。

ジャーナルに関するご意見等は、米国大使館、アメリカンセンターJapan、および各地のアメリカンセンター・レファレンス資料室、または下記の編集部までお寄せください。

Editor, eJournal USA
IIP/CD/WC
U.S. Department of State
2200 C Street, NW
Washington, DC 20522-0501
USA
E-mail：eJournalUSA@state.gov

編集・発行：アメリカンセンターJapan（2014 年 6 月）
本号の日本語文書は参考のための仮翻訳であり、正文は英文です。

本号について

『eJournal USA』本号は、絶望と苦難の生活を記録にとどめるだけでなく、人々の友情と希望を物語る実例を紹介している。本号には次のような人々が登場する。

- 第２次スーダン内戦で家族と離れ離れになり、殺りくから逃れようとしながら幼少期を過ごす少年
- 政治的信念のために祖国で迫害に直面するキューバ人の 10 人家族
- 戦争を逃れ、不安を抱きながら太平洋を渡る少女
- ルワンダの民族抗争を逃れ、路上や難民キャンプで 10 年を過ごす男性

©AP Photo/Ed Ford

米国は第３国に定住する難民の半数以上、他の定住国の合計を上回る数の難民を受け入れている。ニューヨーク市にある「自由の女神像」は米国に着いたばかりの多くの人にとり、希望の象徴となっている

これらの人々はいずれも故国を離れ、難民として米国に着き、米国人の身元引受人に迎えられ、米国で新たな生活を築くための支援を受けた。本号はインタビューや本人の話を通じて、米国で新たな住まいと生活を築きつつある難民たちの物語――そして彼らを案内し手助けしている米国人の物語――を伝える。

多様性と多元性は、米国という国の性格を定義づける特徴の一部である。こうした国民的な価値観に触発され、米国人は個人としても難民を歓迎し、彼らが米国社会に溶け込むのを手助けし、それによって米国の社会的構造を強化している。そして、こうして定住した難民が今度は米国の文化と、国の社会・経済・法的枠組みを豊かにするのである。

本号で紹介する物語や記事は、米国政府による難民支援への深い関与のための取り組みを説明するとともに、その深い関与が、米国の最も新しい――そして最も勇気のある――住民の一部に援助の手を差し伸べ、友人として接している多数の米国人によって具現化されていることを実例で示している。

編集部

難民とは

- 自分の家を退去することを余儀なくされ、
- 身の安全を守るために国境を越え、
- 宗教、人種、国籍、政治的意見あるいは特定の社会集団の構成員であることを理由に、自国において迫害を受ける十分な根拠に基づいた恐れのある

人のことをいう。

米国国務省　2010 年 7 月　第 15 巻　第 7 号

米国で新しい生活を築く難民たち

4 難民への米国の深い関与
エリック・P・シュワルツ、米国国務次官補（人口・難民・移住担当）
世界で最も弱い立場に置かれている人々への支援は、米国外交政策の優先事項である。

5 米国における難民の定住
出典：米国国務省人口・難民・移住局

8 「1980 年難民法」の 30 年
ドリス・マイスナー
この画期的な法律により、何百万もの人々が米国内で難民または亡命者として認定される道が開かれた。

インタビュー
10 もう命がけで逃げる必要はない：スーダンの「ロストボーイズ」の 1 人が新しい祖国で難民の定住を支援
アディエ・デング（スーダン）

体験を語る
14 アフガン系米国人、キューバ人一家の米国での住宅取得や経済的安定を支援
ロヘリオ・エスピノサ（キューバ）
アリ・ナディール（ニューヨーク州ロチェスター）

フォトギャラリー
17 社会に影響を与えた有名な（およびそれほど有名でない）難民
米国で障害を乗り越えて成功し、地域社会の内外で認められた難民の姿

インタビュー
21 「本当に心優しい親切な人たち」：ペンシルベニアで受けた温かい歓迎を語る 2 組の難民家族
カピタノフ一家（グルジア）とカピタノバ一家（ウズベキスタン）

体験を語る
23 イラク人獣医師の心意気と粘り強さが、米国人ボランティアを動かす
モハメド・ユサフ（イラク）
アンドルー・マスロスキー（ワシントン DC）

インタビュー
26 ある難民の 10 年の軌跡：危険と絶望から、介護士として誇りある新生活へ
ジャンビエ・ツゥイシム（ルワンダ）

フォトギャラリー
29 難民が米国で家庭を築くのを手助けする人々
米国に定住し、隣人から支援を受け、新たな家庭を築く難民の姿

体験を語る

32 先生が引率する校外学習で英語の他にも多くを学ぶブータン難民と仲間の生徒たち
カピル・ドゥンゲル（ブータン）
ジョハンナ・ヤング(ニューハンプシャー州コンコード)

インタビュー

36 米国の難民保護政策推進に一役買うかつての児童難民
ホア・チャン（ベトナム）

39 参考資料
難民に関する書籍、記事、ウェブサイト、映像

難民への米国の深い関与

エリック・P・シュワルツ、米国国務次官補（人口・難民・移住担当）

State Department

エリック・P・シュワルツ米国国務次官補

2010年3月17日、米国は「1980年難民法」の成立30周年を迎えた。同法は、世界で最も弱い立場に置かれている人々である難民の保護に向けた、米国の国際的な取り組み体制の礎となってきた。この画期的な法律は、紛争で故郷を追われ戻ることのできない人々のニーズに応えるための効果的で公平な制度の構築を強く求めた、故エドワード・ケネディ上院議員をはじめとする連邦議員らの献身的な努力と情熱の証である。

難民法には、弱い立場にある人々のために思いやりと寛大さを示し、率先して尽くすという米国の最高の価値観と志が反映されている。さらに、同法は何百万にも上る米国人個人による支援をよりどころとしており、それが同法の成功をもたらした根本的な要因の1つとなっている。確かに難民法を制定するための法案を可決したのは米国議会である。しかし最終的には、世界各地からの難民に心を開き、家庭や地域社会を開放して彼らを受け入れることによって、「米国難民受け入れプログラム」を支えてきたのは各地域社会なのである。

ほとんどの難民は厳しい苦難を体験している。彼らは家族や地域社会が住みなれた土地を奪われ、傷つけられ破壊されるのを目の当たりにするとともに、何年、時には何十年にもわたり極めて心もとない状況で暮らしてきた。

米国は1980年以来、250万人を超える難民を定住させてきた。この数は、難民に定住の地を提供してきた他の諸国の合計を上回る。定住と融合のプロセスは困難を伴い、それによる状況の変化に圧倒されている友人・家族を持つ難民も多いが、米国に定住した難民のほとんどは、最終的には新たな環境に順応し、成功している。ただ、それは強大な意志の力、しっかりした地域社会による支援、不屈の忍耐力がなくては成し遂げることのできない適応のプロセスである。1980年以降米国に定住した難民には、今やカリフォルニアを故郷と呼ぶベトナム人やラオス・モン族の人たちもいるし、バグダッドから逃れてきてミシガン湖のほとりで人生の新たなスタートを切ろうとしているイラク人も、東アフリカの乾燥地帯を後にして、ミネソタ州やメーン州で新しい生活を始めるソマリア人もいる。

難民はこれまで数百年にわたって米国に定住し、米国の地域社会、地域経済、国家機構の発展と成功に貴重な貢献をしてきた。米国民として私たちは、この多様性こそが米国の強みだと理解している。私たちがこれまで度々見てきたように、世界各地から来た互いに異なる民族を融合していく米国の能力は、活気あふれる社会、文化・学問の栄えるコミュニティー、良き市民であることを基本とする民主的な統治を創り出す1つのモデルとなっている。国全体として私たちは、世界で一番弱い立場にある人々への支援は米国外交政策の優先事項の1つであることを明確にしてきた。そして、困っている人に手を差し伸べれば、大きな恩恵が得られるということも学んできたのである。

米国における難民の定住

出典：米国国務省人口・難民・移住局

©AP Photo/Aaron Favila

フィリピンから米国に向かう飛行機への搭乗を前に、国際移住機構（IOM）の職員の話に耳を傾けるベトナム難民。米国政府は、IOM と連携して難民の定住を支援している

米国は、移民・難民を受け入れてきた歴史に誇りを持っている。米国の難民定住プログラムは、米国の持つ価値観と志の高さの極みを反映している。米国人は 1975 年以来、世界各地から 300 万人近い難民を受け入れてきた。米国にやってきた難民は、50 州全ての町や都市で新しい生活、家庭、地域社会を築いてきた。

定住：ごく一部の人たちを対象とした解決策

難民とは、宗教、人種、国籍、政治的意見のため、または特定の社会集団の構成員であるために迫害を受ける恐れがあると考える十分な根拠があって本国を離れ、戻れずにいる人を指す。たいていの難民はまず、避難先の国の国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に登録することから始める。UNHCR は難民に国際的保護を提供する任務を負っている。UNHCR は当人が難民と認められるかどうかを判定し、そう認められる場合は、難民各人にとって最善の持続的な解決策を探る。すなわち、本国への安全な帰還、避難先での融合、または第 3 国定住である。

UNHCR の最新の統計によると、難民の数は全世界でおよそ 1,050 万人である。これらの難民の大多数は、避難先の国で支援を受けながら、自らの意思で安全に本国に帰還できるまでそこにとどまることになる。少数の者は、避難先の国で国籍を与えられる。最もリスクの高い難民を中心に、第 3 国に定住することになる者もいるが、その数はさらに少ない。UNHCR の報告によれば、最終的に第 3 国に定住する難民は全体の 1% に満たないが、その半数以上の受け入れ先は米国であり、米国以外の第 3 国に定住する難民の合計を上回っている。

米国の難民受け入れプログラム：定住申請と事案処理

UNHCR が、またはまれなケースとして米国大使館や特別な訓練を受けた非政府組織（NGO）が、第 3 国定住を希望する難民を米国に紹介してきた場合、その事案を最初に受け付けて処理するのは国外選考機関（OPE）である。米国国務省人口・難民・移住局（PRM）は、国際機関や NGO と連携して世界各地域で合わせて 8 つの OPE を運営しており、各地域の OPE は PRM の指導のもと、米国に定住するための要件を満たす難民の申請を処理する。

一部の難民は、UNHCR その他の機関からの紹介なしに直接 OPE に申請手続きを開始することができる。これに該当する難民は、既に米国に定住している難民の近親者や、法令の規定ないし国務省の認定により受け入れプログラムに直接申請する資格を有するとされた特定の集団に属する難民などである。

OPE は、セキュリティーチェックのため、申請者から経歴その他の情報を収集する。セキュリティーチェックは、テロリストや犯罪者が難民受け入れプログラムを通じて米国に入国するのを防ぐ目的で行っている。米国市民権・移民サービス（USCIS）の職員が、OPE の集めた全情報を審査し、申請者と個人面接を行った上で、米国への定住を認めるかどうかを決定する。

米国難民受け入れプログラム（USRAP）を構成する組織と人

- 国務省人口・難民・移住局（PRM）
- 国土安全保障省米国市民権・移民サービス（USCIS）
- 保健福祉省難民定住課（ORR）
- 全米で合計 350 を超える関連団体を持つ国内非政府組織 10 団体
- 自らの時間と技能を提供して難民の米国定住を手助けする数千人の一般市民

USCIS の係官が難民の入国を認めると、次のステップは健康診断で、その目的は難民の医療ニーズを個別に特定するとともに、結核など感染症にかかっている者の米国入国を防ぐことにある。それが済むと最後に OPE は、入国後間もない難民への支援提供に実績のある米国内の定住機関から「支援保証」を取りつける。米国に向かう難民は全員、渡米前に短期の米国文化オリエンテーションを受講する機会がある。

USCIS によって米国内での定住を認められた難民は、難民受け入れプログラム（USRAP）に参加することになる。USRAP は官民共同プログラムで、多数の参加者で構成されている。このプログラムを成功させるには、何百万という米国人の支援が不可欠である。USRAP の立ち上げを指示したのは議会だが、世界各地からの難民を受け入れ支援することによって、この定住プログラムを成功させたのは各地域社会なのである。

申請の処理にかかる時間は、申請者の所在地その他の状況によって異なるが、最初に UNHCR の紹介があってから、難民として米国に到着するまでの平均期間は 8 カ月から 1 年である。

難民の米国到着までの準備

国務省は、難民の定住支援に必要な知識と資源を持つと認められている国内の 10 の定住機関と連携して受け入れ準備を行う。毎週、これら 10 機関の代表者はワシントン DC 近郊で会合を開き、OPE から送られてきた難民の経歴その他の情報を検討し、それぞれの難民について、米国内のどこに住まわせるかを決定する。この会合では、入国する難民それぞれの固有のニーズと、提供できる具体的な資源とを照合させていく。米国内に親戚がいる難民であれば、親戚の近隣に住むか、親戚と同居することになる場合が多い。それ以外は、個々のケースの「スポンサー」となることに同意した定住機関が、各地域社会の資源と難民のニーズを考慮して最善の組み合わせを決める。

決定した定住先に関する情報とスポンサー機関の名称は、その事案の紹介元の OPE に伝えられる。連絡を受けた OPE は国際移住機構（IOM）と連携して、その難民を新しい生活の地へ移動させる。移動にかかる費用はローンの形で提供され、難民は米国内で落ち着いてからその返済の開始を求められる。

米国に到着してから

上述したように、国務省は、難民の定住について国内の 10 機関と協力協定を結んでいる。中には宗教色のある定住機関もあるが、改宗などを求めることは許されない。国務省と国内の各定住機関との標準的な協力協定には、定住機関側が難民に提供しなくてはならないモノとサービスが明記されている。国内 10 機関には、米国内に合わせて約 350 の関連団体がある。それぞれの定住機関の本部が関連団体と連絡を取り、各地域社会が提供できる資源を把握している。（ここで言う資源とは、さまざまな言語の通訳者、提供できる住宅の大きさや特別に求められる機能のほか、特別なサービスが提供可能な学校、医療サービス、英語教室、カウンセリングの利用可能性などである）

協力協定の定めに従って、難民は全て、米国の空港に到着したとき、スポンサー定住機関の関連団体職員または親族・友人の出迎えを受けることになっている。そして空港から、家具と家電製品がそろい、気候にあった衣服と難民の出身地の代表的料理が何か用意されているアパートへ送り届けられる。到着後しばらくして、米国での新しい生活をスタートさせるための支援を受ける。例えば、社会保障カードの申請、子供の入学手続き、買い物施設への道順と利用案内、医療機関の受診予約、社会サービス、言語サービスなどである。

国務省の「受け入れ・配置」プログラムは、難民の米国定住を支援するものである。このプログラムから、最初の数週間にかかる費用に充てるため、難民 1 人につき 1,800 ドルの資金が一括して定住機関に供与される。この資金のほとんどは、難民自身の家賃、家具、食料品、衣料品、さらに定住機関職員の給料、オフィス賃料など、ボランティアによる寄付や提供では賄えない定住関連費用の支払いに使われる。

国務省の受け入れ・配置プログラムの適用期間は、難民の米国到着直後の数週間に限られるが、保健福祉省の難民定住課は、各州と NGO を通じ、より長期間にわたる現金や医療援助、言語・社会サービスの提供に取り組んでいる。

難民は就労許可カードの交付を受け、できるだけ早く職に就くことを奨励される。難民定住プログラムを長年にわたり運営してきた経験から、米国に到着後速やかに職に就いた人たちの方が英語を習得し、無理なく能力を発揮し始めるのがずっと速いことが分かっている。大抵の難民は、高度な技能や教育がある場合でも、初心者レベルの仕事から始める。時間がたつうちに、ほとんどとは言えないにしても多くの難民が仕事で進歩を見せ、米国で成功と満足を手に入れるのである。

©AP Photo/Sayyid Azim

手を振りさよならをしながら、米国内の新しい生活に向けてタンザニアを出発するブルンジ難民

到着から１年たつと、難民は永住許可（一般にグリーンカードと呼ばれる）を申請することになる。そして５年間在住すると、米国市民権の取得申請をする資格ができる。

米国の定住機関

- 教会世界奉仕団（Church World Service）
- 国内・海外伝道協会（Domestic & Foreign Missionary Society）
- エチオピア地域社会開発協議会（Ethiopian Community Development Council）
- ヘブライ移民支援協会（Hebrew Immigrant Aid Society）
- 難民事業局（Bureau of Refugee Programs）
- 国際救済委員会（International Rescue Committee）
- ルーテル移民・難民サービス（Lutheran Immigration & Refugee Service）
- 難民・移民のための米国委員会（U.S. Committee for Refugees and Immigrants）
- 米国カトリック司教会議（U.S. Conference of Catholic Bishops）
- ワールド・リリーフ（World Relief）

「1980 年難民法」の 30 年

ドリス・マイスナー

©AP Photo/Adam Madel

米国定住のための登録手続きをするコソボ出身のアルバニア人家族。「1980 年難民法」制定以来、300 万人を超える難民・亡命希望者が米国に来た

ドリス・マイスナーは、1993 年から 2000 年にかけて、米国移民帰化局の局長を務めたほか、1973 年から 86 年まで米国司法省に上級職員として勤務した。現在は、ワシントン DC にある移民政策研究所の上級研究員である。

「1980 年難民法」により、300 万人を超える人々が米国内で保護と定住の地を得てきた。同法は、個人が難民または亡命者としての地位を取得するための法的根拠を確立することで、世界各地の難民と亡命希望者を米国が受け入れるための門戸を大きく広げたのである。＊

米国は長年にわたり国際的な人間の権利と難民救済の原則に深く関わってきたが、同法の成立は、米国による取り組みのあり方の根本的な見直しを意味するものであった。法案の通過を主導した故エドワード・M・ケネディ上院議員は、兄のジョン・F・ケネディが 1963 年に着手した移民法・移民政策の徹底的な見直し作業の完結に尽力した。リンドン・B・ジョンソン大統領が「1965 年修正移民国籍法」に署名して、それまで 40 年間におよんだ出身国別人数割り当てを終わらせ、米国を全世界からの移民に開放していたが、この修正法を発展させ集大成したのが 1980 年難民法である。

1965 年修正移民国籍法の採択から 15 年の間、米国の法律は難民の受け入れを共産主義または中東諸国の圧政を逃れてくる人々に限定していた。そして、1980 年難民法をもって抜本的改革が完了し、これまでにない水準の移住と難民の定住が実現することになった。一部の人々が米国を「世界初の万民国家」と呼んだゆえんである。1980 年難民法の特徴は

©AP Images/Scott Applewhite

1985 年、米国上院委員会で難民政策に関して発言するエドワード・M・ケネディ上院議員

以下の通りである。

- 1951 年の国連「難民の地位に関する条約」で規定された難民の国際的定義を採用し、難民を、人種・宗教・国籍・政治的意見のため、または特定の社会集団の構成員であるために「迫害を受けるという十分に根拠のある恐れ」から本国を離れ、帰国できない者と定義した。
- 難民緊急事態が起こるたびに急場しのぎの対応をするのではなく、難民受け入れの上限を毎年検討・調整する体系的プロセスを導入した。
- 「政治亡命」という法的名称の下で既に米国内に在住する個人に、難民としての地位を与えることを認めた。
- 米国に到着したばかりの難民が生活を再建し新たなスタートを切れるよう、金銭面での援助および身元引き受け機関への支援の両面で、定住のための援助を規定した。

可決から何週間もたたないうちに、1980 年移民法の規定は実地で試されることになった。

1980 年 4 月から 10 月にかけて、キューバのマリエルから合計 12 万 5,000 人の亡命希望者が船でフロリダの海岸に到着したのである。このときの亡命希望者の海からの流入は、それまで米国が自国領土内で経験した中で最大の亡命緊急事態となった。1980 年以前は、難民として米国に来る資格があるのは、事前に海外で米国への入国許可を得た者のみだったのである。

マリエル事件に続いて、長期にわたる内紛で疲弊した中米諸国からの亡命希望者の波が連続して米国に押し寄せた。米国の当初の対応は財源も不足しており、一貫性もなかった。しかし米国は 1990 年代初頭、亡命に対処するプロセスを再構築し、時宜を得た、即応力があり、公明正大で公平な新制度を確立した。その結果、今や毎年 105 を超える国々から政治亡命者を受け入れているのである。

同様に、米国の海外難民受け入れプログラムも一変した。1980 年代の難民受け入れプログラムは、主に旧ソビエト連邦と東南アジアからの難民を対象としたものだった。しかし今日の米国のプログラムは、当時よりはるかに広範な地域からの難民を対象にしている。そして、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）など主要な国際人道機関や、難民について米国と同様の取り組みをしているカナダ、ノルウェーなどの国々との連携のもとに運営されている。その結果、米国は今、65 を超える国々からの難民を定住させ、世界各地の難民と避難民に救済と支援を提供している。新たに米国に来る難民集団はそれぞれ、米国の多様性に寄与し、米国文化を豊かにしている。

移民問題はこれまで度々論争を巻き起こしてきたが、米国の難民・亡命者受け入れ制度は、広く成功と認められている。新たなニーズ、変わりつつあるニーズに対応できる柔軟性を備えた法的枠組みの中で国際的な人権および難民保護の中核的原則を支持することで、1980 年難民法は、世界で最も弱い立場に置かれた人々の多くに安全を提供する米国の取り組みを前進させた。そしてその結果、ソマリアからコソボ、イラクに至るまで、合わせて何百万という人々が米国の歓迎を受け、この国で希望を見出してきたのである。

＊「難民」は、米国に入国する許可を別の国で受ける。これに対し「亡命希望者」は、事前の審査を経ずに米国に着き、入国時点で政治亡命を申請する。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

もう命がけで逃げる必要はない

スーダンの「ロストボーイズ」の1人が新しい祖国で難民の定住を支援

Courtesy of Julie Denesha

アディエ・デング。4歳の時に南部スーダンの故郷を追われ、あちこち逃げ回ったり難民キャンプで暮らしたりする子供時代を経て、2000年に米国に定住した

アディエ・デングが南部スーダンの家を捨てて逃げたのは4歳の時、第2次スーダン内戦中の1989年のことである。その時離れ離れになった家族は今、ウガンダの難民キャンプで暮らしている。アディエの母はそのキャンプへ向かう途中に亡くなった。

アディエは、エチオピア、そしてケニアの難民キャンプへと苦しい道のりを経て、15歳で米国に定住した。経営学修士号を既に取得して、現在はロースクールに通うとともに、カンザスシティー・セントジョセフ教区で人権担当職員として、新たにやって来た難民を支援している。

問：なぜ、南部スーダンの家を離れることになったのですか。
アディエ：1980年代に北部スーダンと南部スーダンの間で内戦が起きたため、私は住んでいたスーダンの家を離れました。身の安全のためには逃げなければならなかったのです。私たちが村を追われたのは私が4歳の時のことで、逃げた先はエチオピアでした。

問：スーダンを出た時点では家族と一緒だったのですか。
アディエ：いいえ、家族とは別々でした。その時、家族は村にいて、私は家畜を飼いながら寝泊まりするキャンプで働いていました。家畜キャンプと村は別々に攻撃を受け、私たちはそれぞれ違う方向に逃げることを余儀なくされました。両親は南下してウガンダへ、私はエチオピアに向かいました。それで家族と離れてしまったのです。私と一緒にいたのはいとこで、彼は当時11歳でした。

問：いとこと2人でスーダンからエチオピアに着くまでにどれくらいかかったのですか。
アディエ：約3カ月です。というのは砂漠を越え、そこから国境へ向かったのですが、周りはジャングルなので長い時間がかかりました。エチオピアまでは距離にしてほぼ3,000マイルあり、それで約3カ月近くかかったのです。

問：エチオピアにたどり着いてどうなったのですか。
アディエ：エチオピアに入る時にギラ川を渡ったのですが、それはエチオピアでも最も危険で恐ろしい生き物の多い川の1つでした。多分アフリカ全体から見ても、そうだったと思います。ワニに食われたり、溺れたりして、水の中で多くの人が命を落としました。そんな川を渡らなければエチオピア

©AP Photo

デングは、スーダンのいわゆる「ロストボーイズ」、つまり、第２次スーダン内戦（1983-85 年）で故郷を追われた２万 7,000 人を超える南部スーダンの少年たちの１人だった。写真は 1989 年、暴力を逃れるため、戦闘地域外のキャンプで暮らす南部スーダンの人々

にたどり着くことはできなかったのです。それから、何とかそこで落ち着こうと、自分たちで小屋を建てました。その当時、国連はまだいなかったし、周囲には誰もいませんでした。そこはジャングルの中で、エチオピアのどの町からも遠く離れており、私たちにはちょっと厳しい環境でした。

問：エチオピアに入ってから、何が起きたのですか。
アディエ：戦争が起こり、誰も私たちがエチオピア国内にいるのを望まなくなりました。実際には、銃を突きつけられてスーダンへ追い返され、同じ川をもう一度渡るはめになりました。今度はケニアを目指しました。私たちがいた川岸から約 2,000 マイルありました。スーダンからエチオピアへ向かい、さらにケニアへ行くのにほぼ１年かかりました。

問：どうやって助かったのですか。
アディエ：基本的には、いとこのおかげです。それから自分が持っていた信念と希望です。それが支えでした。そんな中でも、状況はいつか良くなる、つまり戦争が終わって、祖国へ帰れる日が来ると、私は願っていました。

一方、皆が口にするものは何でも、葉っぱであろうが何であろうが、食べなくてはなりませんでした。両親のことは考えないようにしていました。もし考えたら、希望を失ってしまいそうな気がしたからです。とにかくやっていけると信じていました。そう思うことで希望を持ち続けたのです。ただ祈るばかりの、そんな日々でした。

問：ケニアに着いてからはどうしたのですか。
アディエ：ケニアでは、［エチオピアとの］国境に近いロキチョギオというところで暮らし始めました。その後、ケニア北部に連れて行かれました。建物はどこにもなく、水もなく、あるのは乾燥した土地だけでした。今度はカクマ難民キャンプと呼ばれる場所でした。ようやく赤十字やユニセフ（国連児童基金）が物資や本、鉛筆などを持って来てくれました。

問：難民キャンプでの生活はどのようなものでしたか。
アディエ：難民キャンプに着いて、私は５歳になりました。［キャンプでの］生活も良くありませんでした。ひどいものでした。キャンプには最低限必要なものさえ十分にありませんでした。それに、学校へも行きたかったのですが、食べるものがなければ、学校に行けるわけがありません。病気もまん延していました。とにかく、難民キャンプでは生活の全てが良くない状態でした。私はそのキャンプで９年半を過ごしました。

問：定住先としてはどこを希望していましたか。
アディエ：米国へ行きたいと思いました。行けたら最高だと思っていました。米国へ渡って、学校へ行き、いずれはスーダンでの和平プロセスに貢献したいと思っていました。

問：あなたといとこがケニアをたって米国へ向かったのはいつですか。
アディエ：2000 年 11 月で、私は 15 歳になるところでした。

問：あなたの身元を引き受けてくれたのは誰ですか。
アディエ：ミシガン州グランドラピッズのベサニー・クリスチャン・サービスが引き受けてくれました。［私のために］里親を探してくれて、その家族と 18 歳になるまで過ごしました。とてもいい人たちで、本当の親のようでした。

問：米国に着いた時の話を聞かせてください。
アディエ：冬でしたが、私はそれ以前に冬を［経験したことがありませんでした］。つまり雪のことですが、本当に寒いと思いました。彼らは私の名前を書いたボードを持って待っていました。外に出て自分の名前を見つけ、彼らに近寄って自己紹介をしたところ、彼らが待っていたのはまさに私でし

た。大きなジャケットのほか着るものをいくつか用意してくれていました。私はそれを着せられて車のところまで歩き、受け入れ先の家庭に行きました。彼らに会えて本当に興奮しました。

問：米国での生活に慣れることについてはどうでしたか。
アディエ：なかなか慣れることができませんでした。要するに、文化が違うのです。カルチャーショック［を受けました］。米国の食事にも、冬にも、また新しい学校へ行くことにも慣れなければなりませんでした。着いた頃は、英語を理解できたものの、実際に話すことは［できませんでした］。そういうわけで、そうしたことを全部、一緒にやらなければならず、大変な時期でした。

問：最終的にはどうやって新しい生活に慣れていったのですか。
アディエ：だんだん落ち着いてくるにつれて、慣れてきました。自分を生かせる場所、そしてやりたいことを見つけ、アドバイスしてもらいました。ベサニー・クリスチャン・サービスのプログラムや集会があったり、スポーツなどをしたり、友達もできました。それはいい経験になりました。ですが、そうですね、自分が米国に来ることになった理由を常に意識していなければいけないと思います。確かに、それがあるからこそ、前に進むことができるのです。

問：それで、何をしたいと考えていましたか。
アディエ：基本的には、教育をきちんと受けたいと思っていました。それが第１で、私が何よりも重要だと考えていたことです。第２は、第３世界の国々から来る人々を支援する組織で働くことでした。そうした組織を見つけられなければ、自分自身で立ち上げることを考えていました。

問：長年にわたり逃げ回る生活を経験した後で、ようやく安定した家庭に入ってどう思いましたか。
アディエ：良かったです。こちらでは治安がしっかりしています。同時に、自分がかつていた所のために何かしたい、そういう気持ちになります。今でも、さらに努力しなければならない、何らかの形で支援しなければならないと感じています。

問：高校生活はどうでしたか。
アディエ：高校は本当に良かった、実に素晴らしかった。楽しかったです。

問：どういうところが気に入ったのですか。
アディエ：たくさんの友人を持てたし、授業や先生も本当に良かったです。仲間と遊びに行ったり、授業に出たり、出歩いたり、楽しく過ごしました。充実した生活で、素晴らしかったと思います。

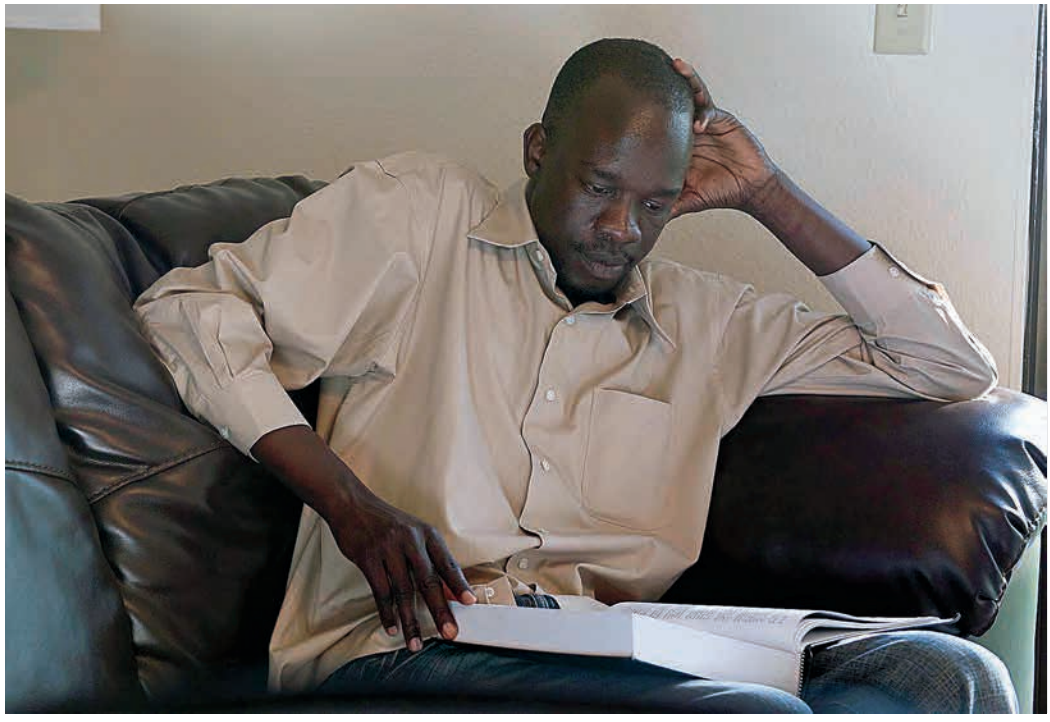
問：高校卒業後はどうしたのですか。
アディエ：高校を出てから大学に行きました。ミシガン州グランドラピッズのアキナス大学に進みました。2007 年に学士課程を終了し、その後ジョン・F・ケネディ大学で経営学を学び、2008 年に経営学修士号（MBA）を取得しました。

問：現在はどうしているのですか。
アディエ：今はコンコード・ロースクールに在籍しており、充実しています。ロースクールは簡単ではありませんし、費用も時間もかかりますが、今までのところうまくやっています。

問：ロースクールに通いながら仕事もしていますね。どこで働いているのですか。
アディエ：カンザスシティー・セントジョセフ教区で働いており、私は人権担当職員です。難民のための仕事探しをしています。現在のような状況［不況］では、移民が仕事を見つけるのは大変です。けれども、私は自分のしていることが好きです。仕事探しの難しさは私自身が米国に来てからずっと経験してきたことです。それだけに、私にはそうしなければならない動機があるのです。私は自分のしていることが気に入っています。

問：難民としての経験が、今の仕事にどのように役立っていると思いますか。
アディエ：基本的に、私には２種類のレンズがあり、そのことがたいへん役に立っています。１つは難民としてのレンズです。私自身がそうですから、難民の立場がわかります。もう１つは米国人としてのレンズです。より良い［サービス］を提供できるようにするには、この２つのことを合わせて考える必要があります。同時に、良い結果を出すには、ある程度戦略的な物の見方も必要です。
［私には］何をすべきかが正確にわかります。というのも、私の心には過去の思い出がすぐに戻ってくるからです。［例えば、］ある依頼人が電話してきて「あの、僕は今日、仕事に行くことになっているんだけど、車がないんだ」と言ったら、私も同じ場面を思い出します。少し前までの自分と同じなので、私には気持ちがわかるのです。

問：米国での生活にはなじみましたか。
アディエ：自分が今いるところが、基本的に自分の故郷であり、［米国での］生活にもなじみました。ここで私は学校に通い、仕事を持ち、アパートもあります。ネットワークもたくさん持っており、友人もたくさんいます。米国の制度もよくわかっていますし、自分のことは自分でするすべを知っています。米国式のやり方に慣れました。



Courtesy of Julie Denesha

デングは、カンザスシティー・セントジョセフ教区で人権担当職員として働きながらロースクールに通う。自分の経験を生かし、新たに米国に到着した難民の支援に当たっている

問：自分自身についてどう捉えていますか。

アディエ：（クスクス笑い）私は今でも［スーダン人と米国人の］両方です。そうですね、私は米国市民ですから米国人です。これが第１です。米国に住み、その市民権を持っているという観点から、私は米国人です。第２に、私はもともとスーダン出身ですから、今でもスーダン人です。

また、私は今でも両方の文化、つまり米国の文化とともにスーダンの文化を身につけており、こうした文化的な部分はこれからも消え去ることはありません。つまり、私の中にはこうした２つの要素が生き続け、流れ続けているのです。私は今でも母語を話しますし、それをいいことだと思っています。今、ここでは英語で話していますが、これももう１つの本当に素晴らしい点です。ですから、私は２つの世界に属しているわけです。けれども、私は米国にいます。自分のアイデンティティーを持ち続けるのは良いことですが、だからといって、自分が組み入れられた新しい制度を拒否する必要はありません。

問：米国市民になった日の感想を聞かせてください。

アディエ：実にいい気分でした。米国市民になることができて幸せでした。この国に長期間にわたって在住し、その市民になる時が来たのです。私にとっての新しい文化と新しい国［を受け入れること］ができて、最高でした。私が願っていたことですからね。

問：どうやってそんなに短期間に多くのことを成し遂げたのですか。

アディエ：忘れてならないことは、自分のビジョンを決して見失わないことだと思います。私はそうしたビジョンや目標を自分のために大切にしてきました。それを達成するのは容易ではありませんでした。しかし同時に、私はどうやったらそれを達成できるかについて常に検証することを心がけて来ました。自分の周辺やコミュニティーの関係者に指示されなくても、自分で計画を立て、そのための準備をし、前へ進まなければなりません。目標に近づくにはそうしたやり方が必要で、私自身そうやってきました。つまり、ビジョンを失わないことです。それと、どう取り組んでいくか、方法論の知識も必要です。多くの人はそうしたビジョンを持たなかったり、途中でどうしたらいいのかわからなくなったりしてしまいます。もう一度言わせていただきますが、自分としてはそうしています。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

アフガン系米国人、キューバ人一家の米国での住宅取得や経済的安定を支援

Courtesy of Jay Capers

ロヘリオ・エスピノサ（前）と家族。（左から右へ）娘のヤニウリス、妻のヤネイジー・ソーサ、息子のオズバルド、母のマルガリータ・セペロ、義弟のダニエル・エルナンデス、姪のチャナヤ・エルナンデス。ニューヨーク州ロチェスターの自宅で撮影。一家は2005年にキューバからロチェスターに定住した

Courtesy of Jay Capers

アリ・ナディール。CFCのアウトリーチワーカーとして、多くの難民が新しい生活に適応するのを手助けしてきた

ロヘリオ・エスピノサ
エスピノサ一家

私の名前はロヘリオ・エスピノサといいます。私と私の家族はキューバのカマグエイ州にあるフロリダ地区から来た政治難民です。最初に、私たちがなぜ、私たちを温かく迎えてくれた、この素晴らしい国に来たのかについてお話ししましょう。父のロヘリオ・A・エスピノサ・ロモは強制収容所に入れられていました。そこはキューバの共産主義政府が「青年労働軍」と呼んでいるものですが、体制に異を唱える人々を収容する刑務所以外の何ものでもありません。

私たちの一家10人は2005年9月、フロリダ州マイアミに着きました。書類の記入などで1日を過ごし、翌日、ニューヨーク州ロチェスターに向かいました。ロチェスターに着くと、アリ・ナディールさんが迎えに来てくれていました。彼はとても礼儀正しく自己紹介をして、スペイン語を話すことができるので、政治難民のケースを扱うカトリック・ファミリー・センター（CFC）に指名されて来たと説明しました。その後、私たちは楽しく和やかな会話を交わしました。それまでは、私たち家族は何もかも違う国に来ることに不安を感

アリ・ナディール

私は子供のころから米国に来る難民や移民のために働いてきました。アフガニスタンのカブール出身の移民の息子として、私は自分の青春時代の多くを、1980年代の戦争を逃れて米国にやって来た他のアフガニスタン人家族を支援して過ごしました。わが家はニューヨーク州北部にあり、祖国での紛争を逃れ迫害を避けるためにやって来た数えきれないほどのアフガニスタン人家族や個人が、一時的に身を寄せる場所になっていました。食卓や寝室、地下室はいずれも、自分自身や子供たちのために米国でより良い生活を求める人たちと一緒に使うことがよくありました。そうした家族についていつも驚かされたのは、米国で英語を覚え、働き始め、地域のコミュニティーや礼拝所に溶け込むのがとても速かったこと

じていました。アリ・ナディールさんは、当面住むことになる家に案内してくれました。アパートにはベッドや食べ物など、私たちがそこに滞在中に必要なもの全てが既に用意してありました。アリ・ナディールさんはこの国でのやり方や、私たちが定住のプロセスを始められるようにCFCがしてくれることを少しずつ説明してくれました。そうしたことは、人生のほとんどをキューバで過ごしてきた両親や祖母のような高齢者にとって、容易なことではありません。CFCは、私たちの新しいケースワーカーであるアリ・ナディールさんと共に、役所関係の書類の処理について、全て面倒を見てくれました。また、私たちが米国の法律、特にニューヨーク州法を理解し、難民給付金などを全て受けることができるように、該当する社会制度についていろいろ教えてくれました。アリ・ナディールさんは、私たちが医師の診察を受ける際など全て同行してくれ、私たちが自立し、社会制度を利用するにはどうすればよいかを具体的に教えてくれました。私たちにとっては何もかもが知らないことばかりで、元いた所とは全然違いました。

CFCが無料の英語教室や、米国での生活によりしっかりと適応できるための信用を得るにはどうすればいいかを教える講座を提供してくれたことも、お話ししておくべきだと思います。例えば、アリ・ナディールさんは「マッチ・グラント・プログラム」について説明してくれました。これは、米国でできるだけ早く働き始めることを条件に、難民に資金提供を行うものです。彼はさらに、この国で安定した仕事を確保することの大切さや、貯蓄や請求書の支払いについても説明してくれました。彼の支援と寛大さがなければ、私たちは生活を落ち着かせ、安心感を持ち、アメリカンドリームを実現することはできなかったでしょう。彼のアドバイスや指導のおかげで、今もそれに従っているのですが、私たちは信用を得て家を購入し、大変うまくいっています。

家を持つことは、この国で最も大切なことの1つです。今、私たち家族はその仲間入りができました。アリ・ナディールさんの助けがなかったら、こうした夢をかなえることはできなかったでしょう。

CFCが職探しを手伝ってくれたこともお話ししておきたいと思います。職探しは英語を話さない人々にとって大変難しいことだからです。CFCは、さまざまな仕事への応募について、その手順を教えてくれました。私たちは何も分からなかったので、これはとても重要なことです。

アリ・ナディールさんとCFCの支援、信頼、専門能力によって私も家族も大変助けられました。彼らの支援がなかったら、私たちは現在のように完全に社会や制度に溶け込むことはできなかった、と私は確信しています。アリの助言はたいへん専門的で教育的なもので、私たちは引き続き彼の助言に従っています。彼は若いにもかかわらず、経験が豊富でした。そうでなかったら、私たちは目標を達成できなかったでしょう。米国に来て間もなく5年になりますが、彼は今でもです。

よその家族の人たちが米国で新しい生活を始めるのを支援することを何年か続けた後、私が13歳の時、私たちはとうとう私たち一族の何人かをこの国に迎えることになりました。私のおばとおじが5人の子供たちと一緒に、戦闘を逃れてパキスタンで何年か避難生活を送った後、米国へやって来たのです。それまで世話をした家族と同じように、私たちは彼らの家探し、子供たちの入学や英語教室への参加、収入が見込める仕事への就職を手助けしました。16年を経た今、私のいとこたちの中には母親になった者もいれば、博士課程の学生やエンジニアになった者もいて、米国で成功し、健康で豊かな生活を送っています。

私は大学卒業後、子供のころの経験を生かして、米国にやって来る難民を支援する活動をもう一度することにしました。ニューヨーク州ロチェスターの故郷へ戻り、カトリック・ファミリー・センター（CFC）に難民定住サービス部門があるのを見つけました。CFCについては驚くことばかりでした。例えば、支援する難民が実に多種多様であること、提供するサービスの範囲が広いこと、そしてCFCとその職員が依頼人との間に強い絆を築いていることです。最も重要なことは、CFCと職員が人々の生活に有意義で目に見える形の影響を与えていることでした。

私がCFCに「アウトリーチワーカー」として雇われたとき、最初に扱ったケースの1つがキューバから来たエスピノサ一家でした。一家は全部で10人、当初から難民認定を受けていました。というのも、家長であるロヘリオ・A・エスピノサ・ロモが、フィデル・カストロ政権によって過去に投獄され、その後、強制労働収容所に入れられていたからです。一家は私にとってCFCで最初に取り組んだケースの1つであっただけでなく、私がそこで担当した人数が一番多い家族の1つでもありました。

大人6人と子供4人という大家族でしたから、それに伴う難題もありました。CFCの標準的な定住プロセスには、家具付きの家や、社会福祉・医療サービスへのアクセス、季節に合わせた衣料・家庭用品の提供、子供の入学支援、移住や法律上の調整手続きに関する支援、職業紹介が含まれていました。しかし10人家族となると、例えば、社会保障カードの申請や結核の予防接種を受けるといったお決まりの手続きでさえ、実に大仕事でした。

定住プロセスには遅れや挫折が時として見られますが、エスピノサ家の皆さんは米国での新しい生活を成功させるために忍耐力、粘り強さ、決意を常に変わることなく示し続けました。CFCの支援を得て、6カ月もたたないうちに完全に自分たちでやっていけるようになり、米国での生活に順応しました。働ける人たちは良い仕事を見つけて経済的に自立し、子供たちは学校に入って少しずつ英語を身につけていきました。ざらに一家としては最初のマイカーを購入することもできました。

Courtesy of Jay Capers

自宅の前に立つロヘリオ。一家はこの家を買うため、一生懸命に働き、貯金し、確かな信用を得た

私たちに連絡をくれて、私たち一家がどうしているか、うまくいっているか気にかけてくれます。私も家族も、また同じ状況にある友人たちも、アリやCFCとの間で問題が起きたことは、個人的にも実務上も一切ありませんでした。

こうした組織や人々は、今やっていることを決してやめるべきではありません。私たち一家と同じような状況で、世界中から多くの人々が米国にやって来ます。アリ・ナディールさんのような専門家やCFCのような政府（原文ママ）機関が世話をしてくれ、米国での滞在や定住ができる限り望ましく有意義な経験となるよう、無条件であらゆる支援をしてくれるというのは素晴らしいことです。

カトリック・ファミリー・センターを通じて米国政府に、また特にアリ・ナディールさんに、心のこもった、専門的で無条件の支援をしてくれたことについて、お礼を申し上げたいと思います。私たち一家のためにあなた方がしてくださった全てのことについて、永遠に感謝の気持ちを抱き続けます。

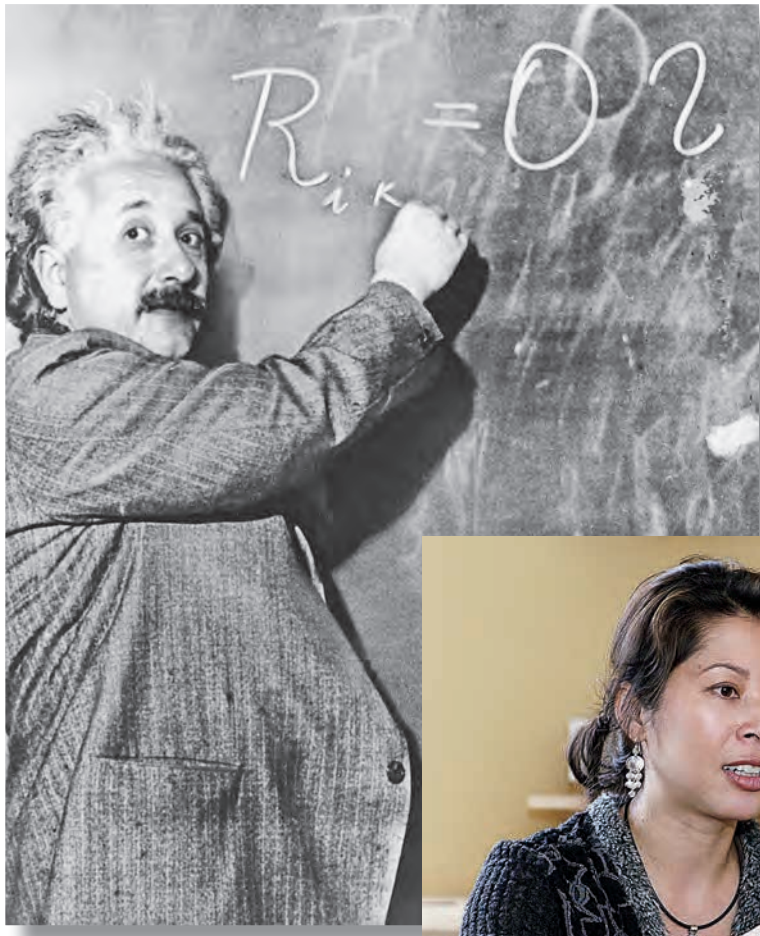
本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

恐らくエスピノサ一家の米国定住で最も驚くべきことは、彼ら自身が成功したということよりも、ロチェスターに定着した移民のコミュニティーにいち早く溶け込んで、入国してくる難民を定期的に支援するようになったことだと思います。CFCは、最大限の援助を提供するため、ロチェスター地区のボランティアや宗教団体、離散定住民グループのネットワークと協力しています。エスピノサ一家はすぐにこの地元のネットワークの一員となりました。一家はロチェスターに来る他のキューバ人家族を何度も受け入れ、手作りの食事や当面の寝場所を提供し、移動を手助けするなど、心からもてなしました。自分たちが米国に着いたばかりのころに受けた親切や思いやりを同じ形で返したいと熱心に取り組んだのです。

現在、エスピノサ一家は、米国に来てからまだ4年足らず（訳注：原文ママ）ですが、定住プロセスがいかにあるべきかを示す絶好の例になっています。米国での最初の数カ月はCFCから支援を受けたものの、今では自分たちの家を持ち、経済的に自立し、米国での生活に完全になじんでいます。子供たちは既に英語を流ちょうに話し、学校の成績もよく、もし大学進学を希望するならば、その機会もあることでしょう。私が子供のころに出会った多くのアフガニスタン人家族のように、エスピノサ一家は米国に受け入れられたことによって新しい生活を始めるチャンスに恵まれ、その機会を最大限に生かしています。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

社会に影響を与えた有名な（およびそれほど有名でない）難民



©AP Photo

アルバート・アインシュタイン
世界で最も偉大な科学者の１人とされるアインシュタインは、相対性理論などの発見で名声と称賛を得た。1921 年、ノーベル物理学賞を受賞。母国ドイツでナチスが政権に就いた 1930 年代、反ユダヤ主義と迫害に直面したアインシュタインは米国へ逃れ、プリンストン大学で教職に就いた。ドイツのユダヤ人の保護のためのロビー活動に精力的に取り組み、1955 年に亡くなるまで米国にとどまった

©AP Photo/Ron Schwane

ルオン・ウン
ウンが５歳だった 1975 年、カンボジア政府はクメール・ルージュによって打倒された。ウンとその家族は首都プノンペンの家を追われ、カンボジア国内での死の行進を強制された。ウンはクメール・ルージュにより児童兵としての訓練を受けたが、何人かの近親者とカンボジアを脱出し、タイ国内の難民キャンプにたどり着いた。その後、米国に定住し、大学卒業後、カンボジアにおける人権擁護を求める作家兼活動家になった。また、米国における「地雷のない世界キャンペーン」の広報担当も務めている

難民は、新しい国への定住にあたり、しばしば困難な問題に直面するが、多くの難民はそうした障害を乗り越えることが可能である。ここでは、米国に定住し、成功を収め、地域社会の内外に影響を与えた有名な（およびそれほど有名でない）難民の注目に値する例をいくつか紹介する。

Courtesy of David Morse, www.david-morse.com

ガブリエル・ボル・デング（中）、ガラング・マユオル（右）、コール・ガラング（左）
デング、マユオル、ガラングの３人は、まだ幼い子供のころ、第２次スーダン内戦（1983-2005 年）中の 1987 年、生まれ育った南部スーダンを離れることを余儀なくされた。南部スーダンではこの内戦で２万 7,000 人を超える男児が故郷を追われて「ロストボーイズ」と呼ばれたが、彼らもそうした子供たちで、エチオピアの難民収容所に逃げた。そこから、ケニアの収容所を経て、2001 年に米国に着いた。３人は個別に南部スーダンの農村の医療・教育の向上を目指す募金活動を行い、2007 年、ドキュメンタリー映画『Rebuilding Hope』（邦題『希望をもう一度』）制作の一環として南部スーダンに戻った

グロリア・エステファン
キューバ革命後、当時まだ赤ん坊だったエステファンは家族と共にキューバを脱出し、マイアミに定住した。やがて、歌手として成功し、彼女のアルバムは世界中で 9,000 万枚以上の売り上げを記録している。グラミー賞を５回受賞。「ラテンポップの女王」と呼ばれている

©AP Photo/David j. Phillip

©AP Photo/Frank Franklin II

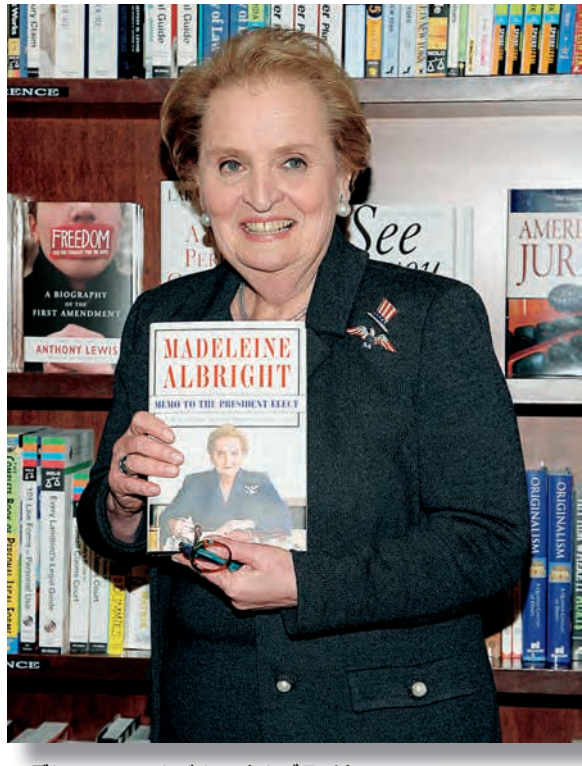
ワイクリフ・ジョン
ジョンは９歳の時、家族と共にハイチを逃れて米国へ向かい、最終的にはニュージャージーに落ち着いた。高い評価を受けた人気ヒップホップグループ「フージーズ」（難民を意味する refugees からとった名前）のメンバーだったが、その後、ソロアーティストとして成功するとともに、ハイチの発展を訴えて支援活動を行っている

ロベルト・スアレス
スアレスは、キューバでフィデル・カストロが権力を掌握した後、33 歳で母国を離れ、米国へ来た。マイアミ・ヘラルド紙の郵便仕分け室で最低賃金の仕事に就いたが、昇進を続け、最終的には同紙社長にまで上り詰め、スペイン語の新聞エル・ヌエボ・エラルドを創刊した。ジャーナリズム界だけでなく、フロリダのヒスパニック系コミュニティーの代弁者として活躍した

Courtesy of Jeep Hunter, The Charlotte Observer

©AP Photo/Alex Brandon

アン・"ジョセフ"・カオ
カオは 1967 年にベトナムで生まれた。父親は南ベトナム軍将校で、北ベトナム側によって投獄された。1975 年、2 人のきょうだいと共に米国へ逃れ、ニューオーリンズに落ち着いた。大学卒業後、難民の擁護者となり、やがて法律の学位を取得した。2008 年、ルイジアナ州から米国下院議員に選出され、ベトナム系米国人として初の米国議会議員になった

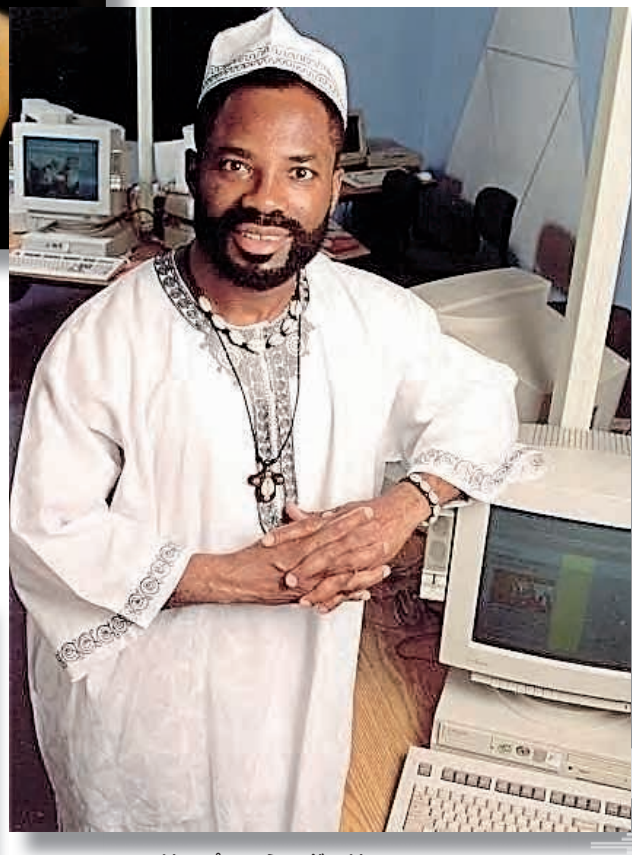


© Jason Kempin/Wire Image

マデレーン・コルベル・オルブライト
現在のチェコ共和国で生まれたオルブライトは、共産主義者が政権に就いた 1948 年、家族と共に米国へ逃れた。一家はコロラド州デンバーに定住。オルブライトはウェルズリー・カレッジに進学し、政治に関わるようになった。1997 年、女性として初の国務長官に就任。当時、米国政府内で最も高い地位を占める女性となった

Courtesy of The Miami Herald, 2010

イボンヌ・クエスタ
1980 年、12 万 5,000 人がマリエル港経由でキューバを脱出しマイアミへ向かった時、当時 7 歳だったクエスタは家族と共にその中にいた。やがて、フロリダ州マイアミデード郡で公選弁護人補になり、現在、マイアミデード郡判事への登用が検討されている。選ばれれば、マリエル港から脱出した難民の中で初のマイアミデード郡判事となる



Courtesy of emeagwali.com

フィリップ・エミーグワリ
エミーグワリは、ナイジェリアで育ったイボ族の一員である。1966 年、ナイジェリア中央政府と南部のイボ族住民との間でビアフラ内戦が勃発したため、難民キャンプで 3 年間暮らした。1974 年、米国へ渡り、その後、大学で数学、土木・沿岸・海洋工学、コンピューターサイエンスの学位を取得して卒業。コンピューター工学の発展に寄与したことを認められ、1989 年、コンピューターサイエンス分野で有名なゴードン・ベル賞を受賞した

©AP Photo/Bebeto Matthews

リー・ルー
1989 年の天安門広場でのデモに参加した後、リーは北京から香港を経由して米国へ向かった。米国でコロンビア大学に入学し、1996 年に、学士号、法律の学位および経営学学位を同時に取得し、3 つの異なる学位を持って同じ日に卒業した同大学史上初の人物となった。投資銀行家として成功し、リーボック人権賞の顧問会議のメンバーを務めている

「本当に心優しい親切な人たち」

ペンシルベニアで受けた温かい歓迎を語る２組の難民家族

グルジアとウズベキスタン出身のメスヘティア・トルコ人の家族２組が、ロシアを経由してペンシルベニア州に定住した。2005年と06年に相次いで米国にやって来たこの２組の家族を支援したのは、同州アンブラーのアッパー・ダブリン・ルーテル教会と近隣住民だった。

エイボス・カピタノフと妻のエルミラは、夫妻の子供たち、エイボスの両親、妹のカリダをはじめとするエイボスのきょうだいたちと一緒に米国へ来た。

ソナムホン・カピタノバは夫と４人の子供と共に米国に定住した。子供の１人が娘のサイーダである。

Courtesy of John Berry

（左から右へ）ソナムホン・カピタノバ、サイーダ・カピタノバ、カリダ・カピタノフ、エイボス・カピタノフ、およびエルミラ・カピタノフ。カピタノバ家とカピタノフ家の人々は、中央アジア、ロシア、ウクライナ、アゼルバイジャンの各地に住む民族、メスヘティア・トルコ人である

問：初めて米国に着いた時は、どうしましたか。

サイーダ：私たちは［家族の中の］第１陣としてやって来ました。非常に大変でしたし、かなり違っていました。両親は心配そうにしていました。父は、米国へ着いてからどこへ行くのか、何も知りませんでしたし、米国でどういう人が出迎えてくれるのか、私たちには見当も付かなかったからです。到着してみると、午前３時の空港にはアッパー・ダブリン教会から15人ほどの人たちが迎えに来てくれていました。その夜は本当に素晴らしい一夜でした。

問：皆さんが米国に着いた当初、支援してくれたのはどういう人たちですか。

エイボス：まず、［近所の］レニガー夫妻が手を差し伸べてくれました。住む家や仕事探し、それに、必要な書類も全部、手伝ってそろえてくれたのです。

サイーダ：［アッパー・ダブリン教会が］貸家を用意してくれていました。家には食べ物も家具も、何でもそろっていました。［私たちが］その家に入りさえすれば、生活できるようになっていたのです。教会には何もかもお世話になりました。学校選びや、両親の仕事探しを手伝ってくれて、必要なものは全部そろえてくれました。毎晩、英語を教えてもらいました。大勢のボランティアが、教会という教会から、また別の所からもやって来ました。役に立ちたいと心から思っている人たちばかりでした。

問：米国へ来て、慣れるのに一番苦労したことは何ですか。

カリダ：主に言葉と学校です。授業は母国とどこか違っていました。言葉は、話すのも理解するのも大変でしたが、懸命に英語を勉強して［言葉の問題を乗り越えました］。

ソナムホン：［最初は］英語を話すのが大変でした。今は皆米国で幸せにやっています。とても満足しています。

問：どうやって米国の暮らしに慣れたのですか。

エルミラ：米国も、ここでの暮らしも好きです。皆いつも笑顔です。私は働きながら大学で勉強しています。庭師の仕事をしながら、ESL［第２言語としての英語］のクラスや、リーディング、数学などの授業を取っています。

問：ペンシルベニアの新しい家をどう思いますか。

エイボス：すごくいい家です。地域もよい地域です。人や車が多すぎず、清潔です。家も新しくて、気に入っています。

問：学校はどうですか。

カリダ：今、中学生ですが、良い学校です。私はどの科目も優等クラスにいます。［生徒は］親切で、いろいろと助けて

Courtesy of John Berry

サイーダ・カピタノバ（左）と母親のソナムホン。自宅を訪ねて来た警察官から、ようこそ当地域へ、と歓迎の挨拶をされ、サイーダは驚いたと言う

くれます、英語のこととかで（クスクス笑い）。特に、6年生の時に一緒だった友達に助けてもらうことが多いですね。

問：こちらに来る前は、米国にどんなイメージを持っていましたか。
ソナムホン：アメリカ映画で見るようなとても華やかな国というイメージがありましたが、［実際には］かなり違っています。

問：米国のことで何か驚いたことはありますか。
サイーダ：初めて警察官に会った時のことです。こちらに来て2日目に、1人の警察官が家を訪ねて来ました。とても驚きました。だってそうでしょう。警察官が玄関にやって来て、「ようこそ」と言ってくれたのですよ。

問：他にも、あなた自身が見知らぬ人から助けてもらったり、家族がハローと言われたりしたことはありますか。
サイーダ：そうですね、近所の人たちはいい方ばかりでした。大家さんはとても親切で、家具のことなどで随分助けてくれました。それに学校の人たちや、主にアッパー・ダブリン・ルーテル教会の人たちにも［お世話になりました］。ボランティアの方も大勢来てくれました。これは非常に素晴らしいことで、驚いたことに、皆さん本当に親切で、手伝いたいと思っている人ばかりです。自分が金持ちだろうと貧しかろうと、そんなことは関係ありません。ただ善意でやってくれているだけなのです。皆、人の役に立ちたいと思っているだけで、悪意など全くありません。

問：自分のことは、米国人だと思いますか、それともトルコ人だと思いますか。
エルミラ：私自身は、［自分を］米国系トルコ人だと思っています。［この国では］米国人でありながらトルコの伝統を守ることができます。家ではトルコの祝日を祝っていますし、アメリカ料理もロシア料理もトルコ料理も作っています。
カリダ：私は年月がたつにつれて、米国人だと思う気持ちが増してきました。それに慣れてきていると［自分では感じています］。でも、自分の［トルコの］文化もまだ失っていません。

問：米国に住んで5年になるわけですが、この5年間で自分がどう変わったと思いますか。
サイーダ：大きく変わりました。アメリカナイズされてきたと思います。運転免許をとったので、わくわくしています。

問：今後の目標は何ですか。大人になったら何になりたいですか。
カリダ：高校を卒業したら心理学の授業を受けたいと思っています。できれば、大学へ行って心理学者になりたいです。
サイーダ：［私は今］短期大学に通っていて、ビジネスと会計を学んでいます。学校が大好きです。卒業して準学士号を取ったら、すぐに4年制大学へ進学したいと思います。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

イラク人獣医師の心意気と粘り強さが、米国人ボランティアを動かす

Courtesy of Javier Barrera

2009 年 2 月、家族と共にイラクから米国に着いたモハメド・ユサフ（左）は、国際救済委員会（IRC）のボランティア、アンドルー・マスロスキー（右）と出会った

モハメド・ユサフ

2003 年、私たちイラク人は皆、戦争はすぐに終わり、サダム・フセインは権力の座を追われ、イラク国民は戦争や殺し合い、破壊とは無縁の生活を送れるようになるものと期待していました。

2003 年 5 月、私を含め数十人の英語を話せるイラク人は、米軍の通訳者として働き始めました。戦後に就くことができた数少ない仕事の 1 つだったのです。私は自分の仕事に誇りを持っていました。イラク人が抱える問題や不安を米軍に伝え、米軍はその多くを解決する、その手伝いをするのが私の仕事だったからです。その後、私はバグダッドの米国大使館で通訳者として勤務しました。イラク人と大使館員の間を通訳して仲介する仕事でした。

2004 年末まで私は大使館の仕事を続けました。その頃、米軍や米軍協力者への武装民兵組織の攻撃が始まったのです。私の同僚を含め、多くの通訳者が殺されました。その後、私はバグダッドの BBC（英国放送協会）で仕事を始め、2007 年 7 月まで続けましたが、殺害の脅迫を受けたため、愛するイラクを離れざるを得ませんでした。家族と共にシリアへ移動し、米国に定住できる日を待ちながら 1 年半余り滞在しました。

アンドルー・マスロスキー

2008 年、私が国際救済委員会（IRC）でボランティアをしようと最初に決めたのは、新聞で読んだ記事がきっかけでした。紛争や迫害を逃れて、米国でより良い暮らしを求める人や家族のことが書いてありました。到着したばかりの難民の米国定住を手助けすることは、楽でしかもやりがいのある仕事だろうと考えていました。簡単で容易な仕事だろうし、米国で生まれ育った生粋の米国人として、米国の生活に関する私の知識を伝えることができると思っていました。難民の人たちは私に質問するだけだし、私に分からない事はないと思っていました。難民の定住と米国での生活への適応を手助けするのは、私がその昔に大した努力もせずに優秀な成績を取っていた試験に、生徒が合格する手伝いをするようなものだろうと想像していました。しかし、自分がやろうとしていることをほとんど理解していなかったことや、自分から学ぶはずの人たちから自分がいかに多くのことを教わることになるかということに気付いたのは、ずっと後になってからでした。

モハメド一家に会ったのは 2009 年 3 月のある日のことでした。会う前に IRC から電子メールをもらっていましたが、それには家族の名前やワシントン DC 郊外の住所が書いてあ

Courtesy of Paul . Gillespie www.pwgphoto.com

Courtesy of Paul W. Gillespie www.pwgphoto.com

（左）ユサフの息子たち（前列）。（左から）アブドゥッラ・ヤフヤ（5 歳）、ハイダー・ヤフヤ（7 歳）、アフマド・ヤフヤ（11 歳）。（後列、左から）モハメド・ユサフ、娘のラハフ・ヤフヤ（2 歳）、妻のスーザン・モハメド。メリーランド州の自宅の外で

（上）娘のラハフに届いたばかりのグリーンカードを誇らしげに見せるユサフと妻のスーザン（ラハフはここには写っていない）。子供たちは米国で良い暮らしができるとユサフは期待している

2009 年 2 月、私は妻と男児 3 人、女児 1 人の子供 4 人を連れて渡米し、家族の新たな生活が始まりました。米国では何もかもが新しいことばかりで、バスや地下鉄に乗る、医者に予約を入れるといった簡単なことでも、慣れるのが大変でした。私は英語を話すので、米国人の言うことを理解したりコミュニケーションをとったりすることは比較的容易でしたが、英語が分からないイラク難民は大変です。そうした人たちに頼まれれば、私は通訳者としてお手伝いしています。家族も私も、新生活に慣れる上で多くの困難がありましたが、重要なのは、米国では身の安全を感じられたことです。

米国では、「国際救済委員会」（IRC）から支援を受けていますが、実際に支えてくれたのは友人やボランティアでした。物事を説明してくれたり、質問に答えてくれたり、いろいろと私たちを助けてくれました。IRC のボランティア、アンドルー・マスロスキーは、私たち一家が米国に着いて間もない時期に支援してくれた 1 人です。私と親友になったアンディは、今でも私と家族を助けてくれています。アンディはこちらに着いて最初に会った米国人の 1 人でした。医者の見つけ方などいろいろな事を教えて支えてくれました。私たち一家が新しいアパートへ引っ越す時には、アンディと友人たちが手伝ってくれました。履歴書を書く手伝いもしてくれました。何かについて知る必要があれば、私はアンディに尋ねます。するとアンディは適切な答えを見つける手助けをしてくれます。他のイラク人難民に尋ねられたことを質問する場合もありますが、そういう時でもアンディは手助けしてくれます。

定住した当初、難民が新しい社会に溶け込むには、正しい情報を入手する必要があります。アンディをはじめとするボランティアは、履歴書の書き方や仕事の探し方、出費を減らすためにはどの店へ買い物に行けばいいかなど、多くの事を難民に教えてくれます。他にも知らない事を教えてくれて、そのおかげで暮らしやすくなることもあります。ボランティる程度でした。最初に会った日は、自己紹介をしてお互いのことを知り合うことで時間が過ぎていきました。一家にとって私は赤の他人でしたが、ジュースや果物でもてなし、大いに歓迎してくれました。まずモハメドが家族全員を紹介し、次に私が話す番になりました。来る前に私の頭の中では、モハメドはこういうことを望むだろうとか、こういうことが必要だろうと、全てを決めつけていました。米国式の履歴書が必要だ、運転免許を取ることも考えなければいけない、インターネットを使った仕事の探し方も覚えなくてはいけない、などといったことです。当然、私はこうした事から始めればよいだろうと思っていました。

ですから、モハメドの最初の質問を聞いて、私は不意を突かれました。メリーランドに来たばかりの難民はメディケイドという医療費補助制度の対象になりますが、この制度を利用して診療を受けられる外科医を地元で見つけるにはどうすればよいか、というのがモハメドの質問だったからです。モハメドは米国で、あるイラク人女性と知り合いになっていました。モハメドと同じワシントン DC 郊外に定住していたその女性は、イラクで被弾し、銃弾が体内に残ったままになっていました。どうすれば彼女の役に立てるのか、とモハメドは私に聞きたかったのです。

米国に初めて来た難民の不安や心配、気がかりについては、私なりにいろいろ想像していましたが、私の想像などほんの一部に過ぎなかったことがすぐに分かりました。もちろん、モハメドは自分の家族を気遣っていたし、仕事を見つけて妻

アや友人たちは私の家族を助けてくれ、精神的な意味でも私たちの大きな支えになってくれました。

米国へ着いた時、私には、十分な収入がある良い仕事に就いて家族を支えたいという夢がありました。職を求めてあらゆる機会に応募しましたが、この夢をかなえられるだけの仕事はまだ見つかっていません。見つかったのは、イラクなど外国からの難民を支援するボランティアの仕事だけですが、ボランティアの仕事に給料はありません。現在は、政府からもらう食料配給券と給付金がわが家の唯一の収入です。

IRC は家賃の 3、4 カ月分を支払ってくれて、ある程度の物資も援助してくれるものと思っていました。しかし、家賃は 1 カ月分しか支援してくれませんでした。ありがたいことに、知り合いになった米国人の中に私たちを支援してくれる人がいました。その人たちのおかげで、前より狭いけれど、もっと手頃な賃料のアパートを借りることができました。彼らの支援がなければ、このアパートを借りることはできなかったと思います。

私も他の難民も、政府の援助に頼りたいとは思いません。働いて収入を得て、自分の家族にまともな暮らしをさせてやりたいのです。定住した難民に適した仕事を与えることが、難民が抱える問題の解決策なのです。たとえ英語をよく知らない難民でも、英語を話す人と職場で接していれば英語力を向上させることができます。

国際移住機関（IOM）、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、米国政府は、何千人もの難民の米国定住を支援してきました。次のステップは、私たち難民が適切な仕事を見つけて、米国社会にもっと溶け込めるようにすることです。イラク難民の大半は大卒で、さまざまな分野で経験を積んでいるため、自分たちの技能を十分に生かしたいと望んでいます。私も含め難民は、生産的な市民として米国社会に積極的に参加したいのです。そうなることを願っています。

私の職探しはうまくいっていませんが、子供たちにはチャンスがあると思います。米国の教育は最高です。子供の 1 人は 1 年生で英語の読み書きができます。良い学校に行っているからです。素晴らしい先生方が十分に面倒を見てくれます。子供たちは良い教育を受けて、米国でいい暮らしをすることができると思います。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

と子供を養っていくことについても心配していました。獣医師の仕事を再開したいと思っていたのは確かです。米国主導のイラク侵攻が行われた後、獣医師のキャリアを捨てなければならなかったからです。しかし、モハメドにとって、助けを必要とする人がいれば、その人を助けることも、自分の家族を支えることと同様に大切なことだったのです。

モハメドには広い心、他人を助けたいという意欲と願望のほか、未来への希望を捨てずに持ち続ける能力があり、そのことに私はいつも驚いています。モハメドは戦禍で荒廃しわが身の安全も脅かされるような国から米国に来たわけですが、それに加えて、彼が米国に着いたのは、あいにく深刻な不況で多くの米国人が職探しに必死になっている時でした。難民が利用できる資金や援助は、数カ月もすれば難民は就職して経済的に自立できるという想定に基づいて考えられたものです。新しい国へ来て、仕事を見つけ、人生を立て直すのは決して容易なことではありませんが、景気の低迷期だったために、それが一層難しくなってしまったのです。それにもかかわらず、モハメドは楽観主義を失わず、自分と家族のために良い未来を築くことに心を傾けています。

最近到着した難民を手助けする仕事に応募した時、難民は自分たちが何を必要としているかをはっきり口に出して言ってくれるもの、そして私の仕事は、彼らに必要な情報なり援助なりを提供することだと私は思い込んでいました。数カ月もあれば、私が世話をする難民は生活も落ち着き仕事も見つかり、私の方には明確な達成感が残るものと予想していました。ところが、私とモハメド一家との関係は数カ月どころか今でも続いています。モハメドに仕事を見つけるといった基本的な問題もまだ片付いていません。そして、私が感じているのは、モハメドとの間に培われた友情への深い感謝であり、モハメド一家のような人々の勇敢さと勇気への心からの敬意なのです。

編集部注：米国のイラクにおける難民援助プログラムについて、詳しくは米国大使館のウェブサイトを参照。
http://iraq.usembassy.gov/refugeesidpaffairs.html

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

ある難民の 10 年の軌跡
危険と絶望から、介護士として誇りある新生活へ

Courtesy of Mike Fender

同僚と一緒のジャンビエ・ツゥイシム。ユナイティッド・ホーム・ヘルスケア社で在宅介護助手として働くツゥイシムは、仕事があるから「米国で生活を立て直せた」と言う

ジャンビエ・ツゥイシムはルワンダの家を捨てて避難し、長い旅に出た。西アフリカからベルギーを経て、2009 年に米国へたどり着いた。10 年に及ぶこの旅で経験したホームレスの暮らしや 4 年間の難民キャンプ生活、そして米国での新しい生活について語る。

以下は、インタビューとジャンビエからの電子メールの内容を合わせて構成したものである。

問：ルワンダを出たのはいつですか。
ジャンビエ：1999 年です。

問：なぜルワンダを離れたのですか。
ジャンビエ：1994 年の大虐殺の後、フツ族の過激派は DRC［コンゴ民主共和国］へ逃れました。1994 年の大虐殺で私の自宅は破壊されましたが、その時は建て直しました。しかし 1999 年、虐殺に参加したフツ族がルワンダに戻り、ツチ族への殺りくが再開されました。虐殺者は私の家にもやって来ました。玄関の扉をこじ開けられたので、窓から飛び出して逃げ、命が助かったのです。1 人でキガリへ逃れ、二度と戻りませんでした。

問：どこへ行ったのですか。
ジャンビエ：キガリからトーゴへ行き、それからベルギーへ行きました。トーゴには 1 年いました。トーゴ人の友人にかくまわれていたのです。ベルギーには 1 カ月間いました。ベルギーでは不法移民と難民の収容施設にいましたが、強制退去になりました。

問：強制退去になった時はどんな気持ちでしたか。
ジャンビエ：心の底から理不尽だと思いましたし、とても悲しかったです。当時の状況を説明するのは難しいですね。

問：トーゴにはどのくらいの期間いましたか。トーゴで何が起こったのですか。
ジャンビエ：トーゴにいたのは 9 日間［訳注：トーゴに再入国したとき］です。トーゴに着いた時、憲兵隊［警察］に逮捕されて刑務所へ送られました。憲兵隊に、おまえは合法移

民ではない、と言われ、9日間拘留されたのです

拷問を受け、大勢の人と一緒に監房の床の上で眠りました。十分なスペースがなく、横になることもできませんでした。蚊がたくさんいて雨が降ると窓から吹き込んできました。シャワーを浴びることもできず、トイレを使うことも許されませんでした。バケツが置いてあっただけで、トイレットペーパーはありませんでした。ひどい状態でしたね。時には看守にひっぱたかれたこともありました。また何か皮膚病にかかってしまいました。

食事はほんの少ししか与えられず、それも1日1回だけでした。私の体が弱ると、憲兵隊［警察］から、これ以上おまえの面倒は見たくないと言われました。私は手錠を掛けられ、車に乗せられ、トーゴとガーナの国境まで連れて行かれました。憲兵隊員から書類を渡され、署名するように言われました。そこには、トーゴに戻ってきたら逮捕するかルワンダへ送還すると書いてありました。署名すると、憲兵隊員は手錠を外し、私をガーナ側へ追いやったのです。

Courtesy of Mike Fender

ツゥイシムは1999年、33歳の時、母国ルワンダの部族間抗争を逃れて避難した。現在は、インディアナ州インディアナポリスに在住

問：その後はどうなりましたか。
ジャンビエ：首都アクラにあるUNHCR［国連難民高等弁務官事務所］へ［向かいました］。私には家も仕事もありませんでした。2002年5月に、UNHCRはアクラにある難民一時受け入れ施設へ私を入れてくれました。2005年1月、UNHCRは私をガーナのクリサン難民キャンプへ移しました。2009年3月までそこにいました。

問：難民キャンプの暮らしはどのようなものでしたか。
ジャンビエ：ひどい暮らしで、何の設備もありませんでした。水はありましたが飲み水にはならないものでした。土が痩せていて農作物を作れないため、食べ物もあまり手に入れることはできませんでした。難民キャンプでは十分な食料をもらえず、非常にひもじい思いをしていました。感染症や病気も発生しました。絶望を感じ、精神的なショックが非常に大きい状態が続きました。人をかむヘビやサソリもいましたし、他にも悲惨なことがたくさんありました。私は希望を失いました。話せば長くなるだけで、嫌な話です。

問：どこへ行きたかったのですか。
ジャンビエ：米国が好きだったので行きたいと思っていました。米国はチャンスがある国、人生の再出発の国、自由の国です。素晴らしい国で、米国では人生を取り戻して立て直す機会がたくさんあります。米国の人たちは親切、寛大で、包容力にあふれています。そういう国だと知っていたから、米国が好きだったのです。

問：米国へはどのような経緯でやって来たのですか。
ジャンビエ：アクラの米国大使館で米国人に会う機会があり、2007年か08年に私のファイルがUNHCRから大使館へ届けられました。2年後に、面接と健康診断、オリエンテーションを受けただけで、ガーナを出国しました。大使館の人たちはとても素晴らしく、私をいろいろ助けてくれました。

問：米国へ向けて出発した日はどのような気持ちでしたか。
ジャンビエ：助かったと思いました。とてもうれしかったです。

問：どこへ着いたのですか。空港には誰が迎えに来ましたか。
ジャンビエ：着いたのはインディアナポリスです。私を引き受けてくれたエクソダス・イミグレーション（Exodus Immigration）という地元の難民支援組織が空港で出迎えてくれました。とても親切でいい人たちでした。

問：米国の生活で最初の思い出は何ですか。
ジャンビエ：幸福感を味わったことです。この国に来ることができて本当に幸せでした。これ以上の幸せはありませんでした。

問：空港へ着いた後は、どうしましたか。
ジャンビエ：エクソダスの人たちが新しい住まいへ連れて行ってくれました。私の家を見せてくれたのです。その後すぐに、店へ連れて行ってくれて食料を買いました。

問：自分の家で過ごした最初の日の感想はどうでしたか。
ジャンビエ：天国にいる気分でした。

問：米国へ来る前から英語はできましたか。エクソダスはフランス語の通訳者を用意してくれましたか。
ジャンビエ：英語はほんの少ししかできませんでした。フランス語を話せる人がいましたが、その人は簡単な英語を使ってコミュニケーションをしようとしました。彼は私に話しかけようと努力し、私のほうも彼の言うことを聞きとろうと努力したので、理解するのは難しくありませんでした。エクソダスは早速私を英語教室へ連れて行ってくれました。先生方は経験豊富で積極的で、優れた教育者でした。

問：エクソダスは仕事探しを手伝ってくれましたか。
ジャンビエ：はい。着いて1カ月もたたないうちに、私は仕事を始めていました。ある会社で造園の仕事をして働きました。

問：何か困難なことはありましたか。
ジャンビエ：難しかったのは言葉だけです。アフリカにいる時に少しばかり知っていた英語は、こちらの英語とは違います。アクセントや発音が問題でした。中には話し方がすごく速い人もいて、そういう人の話についていくのは大変でした。しかし、文化の面では問題を感じませんでした。私はとても柔軟性がありますから。

問：米国到着直後と比べて、今の生活をどのように感じていますか。
ジャンビエ：違うのは、自分がいくらか成長しつつあるということでしょうか。米国に来た当初は、不慣れでしたが、今では生活を立て直せたと感じています。米国へたどり着いた時、自分自身を大したやつだと思いましたが、今はもっと大したやつだと感じています。米国の活動的な面を感じています。米国の人々と兄弟であるような気持ちを抱いています。ここが私の故郷なのだと思います。

問：そのように変わることができたこと、自分を米国の一部だと感じられるようになったのは、どうしてだと思いますか。
ジャンビエ：人々は私を受け入れ、助けてくれました。それで、私は社会で生活できるようになったのです。米国の人たちが私を米国社会に溶け込ませてくれたのです。私を助けてくれるとても親切な人たちがいたからです。仕事に就き、在宅介護助手（HHA）の資格を取ることができたのは、自分の能力もありますが、周囲の人々の支えがあったからです。今、とても幸せです。

問：あなたを支えてくれたのはどのような人たちですか。その人たちはあなたをどのように受け入れ、地域になじむようにしてくれましたか。
ジャンビエ：エクソダスの人々や教会で知り合った人たちです。中には、夕食やクリスマス、感謝祭に自宅へ招いてくれた人もいました。野外での社交の集まりやインディアナの田園地帯を楽しむ行事に誘ってくれた人、教会の活動に誘ってくれた人、私の自宅に訪ねてきてくれた人、電話をかけてくれた人、電子メールやプレゼントをくれた人と、さまざまな人たちがいました。そうした人たちが仕事探しや生活再建を手伝ってくれたのです。エクソダスの人たちは医者や就職面接、自動車教習所へ連れていってくれました。

問：インディアナポリスでの暮らしをどのように思っていますか。
ジャンビエ：とても気に入っています。楽しい暮らしで、幸せです。米国の持つエネルギー、この国の人々、文化が好きです。米国の全てが気に入っています。

問：どんな仕事をしているのですか。
ジャンビエ：私の新しい仕事は、在宅介護助手で、ユナイティッド・ホーム・ヘルスケアという介護サービス会社で働いています。患者さんの手助けをする仕事です。この仕事がとても気に入っています。私は認定看護助手［CAN］と在宅介護助手の資格を持っています。会社の人たちはとても親切で、人間味にあふれた素晴らしい人ばかりです。この会社に応募した時、面接で私が米国へ来たばかりだということを知ると、心配してくれました。早く仕事を始めて、この国で暮らしを立て直してほしいと思ってくれたのです。それに、私の仕事ぶりと顧客への対応ぶりに大変満足してくれました。私がきちんとした仕事をしているので、会社の人たちも私を支援してくれ、私は試験に合格してもう1つ資格を取得することができました。インディアナ州保健省が発行する在宅介護助手［HHA］という資格です。ですから、私は現在、CANとHHAという2種類の資格を持っています。会社の人たちはとても協力的です。

会社の人たちは、私が前に進むよう応援し続けてくれます。仕事時間を増やしてお金を稼げるように、私に新しいシフトを探して［入れて］くれました。そのシフトが始まれば、1日12時間、1週間で60時間働けるのですよ。うれしいですね。

問：自分を米国人だと思いますか、それともルワンダ人だと思いますか。
ジャンビエ：どちらかというと米国人だと思っています。ずっと米国で暮らしたいです。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

難民が米国で家庭を築くのを手助けする人々

©AP Images/Dave Weaver

ネブラスカ州で、スーダン難民の子供に英語を教える女性。南北スーダン内戦では、何百万人もの人々が住みなれた土地を離れ、別の場所に避難することを余儀なくされた

©AP Images/Mary Ann Chastain

サウスカロライナ州でのクリスマスタ食会で、ソマリア系バンツー族難民に料理を取ってあげるボランティア。難民に新しい食べ物や慣習を紹介し、新しいコミュニティーの一員であることを実感できるようにするため、ボランティアはさまざまな文化イベントを主催する。難民たちも、お返しに、新しい友人たちに自分たちの文化や経験を披露する

難民は米国に到着すると、定住支援組織や身元引受団体、ボランティア、近くに住む人々の支援を受ける。こうした支援により、難民は気持ちを落ち着かせ、生活の再建にとりかかる。ここでは、難民が米国で支援を受け、新しい家庭を築き、成功している姿を紹介する。

©AP Photo/The Indianapolis Star, Robert Scheer

到着後間もないソマリア系バンツー族難民に台所の水道の蛇口の操作方法を説明する地域住民。バンツー族難民のほとんどはソマリアの農民で、ケニアの難民キャンプへ避難していた。米国式の家電製品やガス・電気・水道を使う生活は、難民の多くにとって、以前の暮らしと様子が大きく違う

©AP Images/The Gazette,Laurie Matanich

アフガン難民に付き添い雑貨食料品店へ行き、商品について説明するボランティア。1979 年のソ連によるアフガニスタン侵攻後、アフガン難民が米国に到着し始めた

©AP Photo/Darron Cummings

インディアナ州で、難民定住支援団体「エクソダス・レフュジー・イミグレーション」の職員との会合のために集まったビルマ難民。職員から用紙の記入方法や新しい生活への適応の仕方について説明を受ける

©AP Photo/Charles Rex Arbogast

ニュージャージー州フォートディックスで、コソボ難民の 1 人が、コソボからの他の難民たちがコンピューターでネットサーフィンをし、難民関連サイトの情報を見るのを手助けしている。1999 年、フォートディックスには約 4,000 人のコソボ難民が一時的に滞在し、米国の別の場所への定住を待っていた

©AP Photo/Steven Senne

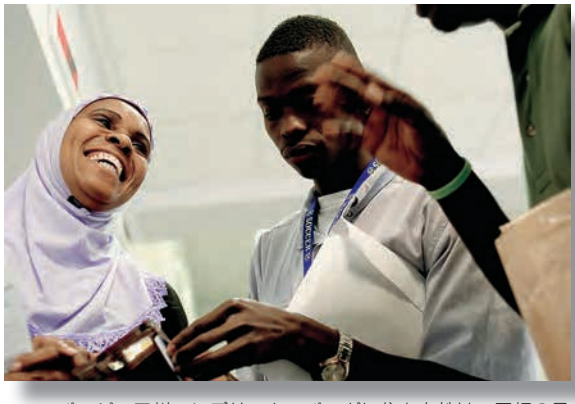
里親の夫婦とマサチューセッツ州の家で話をするビルマからの難民。ビルマ難民の多くはカレン族で、ビルマの軍事政権を逃れて脱出した。米国へ到着する前に、タイの難民キャンプで何年も暮らした人もいる

©AP Photo/Keith Srakocic

2 人の難民に、その一家が住むことになったアパートのシャワーと浴槽の使い方を説明するカトリック慈善団体のケースワーカー。一家はブータンからネパールへ脱出し、その後、ペンシルベニア州に定住した。米国は 2008 年、ブータン難民 6 万人の米国定住を提案し、同年、難民の受け入れを開始した

©AP Photo/The Baltimore Examiner, Kristine Buls

メリーランド州で開かれたフォトキャンプで、受講生と作業をするナショナルジオグラフィック誌のカメラマン。受講生はメスヘティア・トルコ人の難民で、写真に関心があり、ボルティモア・シティ・コミュニティー・カレッジの難民青年プロジェクトに参加した



©AP Images/The Free Lance-Star, Reza A. Marvashti

バージニア州フレデリックスバーグに住む女性は、医師の予約や住宅の手配など、地域に移ってきた難民を支援する仕事を数多くこなしている。この写真では、バージニア州自動車局に運転免許を申請するリベリア難民の手助けをしている。リベリアでは 14 年間にわたる内戦で、数千人が米国へ脱出した

©AP Images/Paul Sancya

イラク難民一家と面会する身元引受人とケースワーカー。医療援助と就労許可を受けるのに必要な申請書について説明している

先生が引率する校外学習で英語の他にも多くを学ぶブータン難民と仲間の生徒たち

Courtesy of Max Bittle

住んでいるニューハンプシャー州コンコードを巡るESOLの校外学習で、クラスメートと路面電車に乗るブータン難民のカピル・ドゥンゲル

Courtesy of Max Bittle

ジョハンナ・ヤングは大学院生の時に、難民を支援したいという強い気持ちを抱くようになった。現在は、米国へ移住してきたばかりの難民に英語を教えている

カピル・ドゥンゲル

2009年7月29日、ネパールのブータン人難民キャンプから米国へ着いて1カ月と7日がたったその日、私は英語を習い、新しく住むことになった地域について学んでいました。ルーテル社会事業団（Lutheran Social Services）という寛大な団体が運営するESOL［英語を母語としない人のための英語学習］のクラスで、先生はジョハンナ・ヤングでした。先生は、私たち難民定住者の役に立つことを教えてくれました。英語の発音や書き方を教わりました。こうした授業の他に、先生は私たちを校外学習へ連れ出してくれました。とても楽しかったです。ニューハンプシャー州コンコードに着いた当初は、慣れないことばかりで適応するのが大変でしたが、このESOLの授業と校外学習を通じて、私は新しい故郷に慣れ親しんでいったのです。

先生に連れられて校外学習に出かけ、私たちはそれまで知らなかったことを数多く学びました。例えば、ネパールと米国では交通規則が大きく違います。ブータンでは運転席は右側にあり、車は左側通行ですが、米国では逆です。ブータンでは横断歩道を渡るのに信号機のボタンを押す必要はありません。横断歩道では、車が来ていないことを確かめて道の向こう側へ渡るだけです。校外学習では、実際に街の中を歩き、道路の渡り方を教わりました。横断歩道のボタンを押して、

ジョハンナ・ヤング

快適な暖かさのある夏の日。ESOL（英語を母語としない人のための英語学習）クラスの生徒20人余りを連れて、私はニューハンプシャー州コンコードの町をあちこち巡る校外学習に出かけます。鉛筆と紙を手にした20代前半から70代中頃までの大人の難民が、語彙練習帳にある目標物を探しながら町を歩き、見つかったらそれに印を付けていきます。

この校外学習は、生徒に町を案内するだけでなく、野球の仕方を教えることも目的にしています。生徒の多くは、ネパールの難民キャンプで17年以上を過ごし、ようやく米国へ着いたブータン人ですが、アフリカ諸国からの難民もいます。生徒たちは野球を少し覚えてみようと意欲満々ですが、女性はほとんどが尻込みし、男性にバットを渡してしまいます。事前に、野球に出てくる簡単な言葉を勉強してあります。「ホットドッグ」「ホームラン」「捕球する」「投げる」などです。私が基本的なルールを説明するのですが、すぐに試合はブータン式の野球になってしまいます。生徒の中にはクリケットを少し知っている者もいますが、野球は全く知りません。幸い、私は柔らかいバットとボールを持ってきています。というのも、生徒たちは打者をタッチアウトにしようと、打者めがけてボールを投げるからです。打者にならないことにした生徒は、打席に立つ生徒を見て大笑いします。教室へ戻

Courtesy of Max Bittle

ヤング（中央）と ESOL クラスの生徒たち

信号が変わるのを待って渡るというやり方です。

クラスには 22 人の生徒がいましたが、歩きながら目に留まったものを何でも観察し、それについて話し合いました。先生は、新しい物を見つけたらその名前を読んでみて、名前と見た場所を書き留めるように言いました。歩いて何分か行ったらレストランがあり、そこでピザを買いました。見たことのなかった物や食べ物をいろいろ知りました。レストランの先に、フードバスケットがありましたが、これも食料品店だと分かりました。

フードバスケットについて少し教わってから店を出ると、そのすぐ先にワシントン・ストリート・カフェがありました。ブータンにあるお茶の屋台のようなものでした。そこからまた歩き始めて、通りの右側にあるフランクリン・ピアース・ロースクールに着きました。「この学校はどういう学校か」と先生に質問すると、ここは法科大学院で、私たちの子供も将来ここで学ぶことができるかもしれないと言いました。

ロースクールの前には噴水がありました。公園のような所でした。もう少し詳しく説明してくれるように先生に頼むと、説明してくれました。美しい池に、野生のカモの大きな群れがいました。カモは人間を恐れもせず池を泳いでいました。先生の話では、なんと全部メスだということでした。人間がパンくずを餌に与えるため、人に慣れていたのです。ブータンにも同じ種類の野生のカモがいたので故郷を思い出しました。

校外学習では、2 人の米国人にも会いました。「これから皆でどこへ行くのか」と聞かれました。私たちは全員米国へ来たばかりで、ESOL のクラスで校外学習をしているところだと答えました。別の人が「どこの出身か」と尋ねるので、私は「ブータンから来た」と答えました。すると「米国は好きか」と聞くので、「とても好きだ」と言いました。彼らのことは知りませんが、親切でいい人たちだと思いました。

る途中、フランクリン・ピアース・ロー・スクールでバーベキューをしているところに通りかかります。さあ、教える絶好の機会がやって来ました。グリルで焼いているホットドックを生徒に見せることができます。料理している 1 人があいさつしてくれると、生徒は皆口々に「こんにちは」とあいさつを返しています。

校外学習は、新しい言葉を覚えたり、地域社会について学んだりするだけではありません。生徒がリラックスして大笑いしたり、質問したりする機会でもあり、住民が庭で何を育てているか調べるチャンスさえあります。ある授業で、生徒たちは見たことのない動植物の名前を学習しています。そして、ホワイト・パークへ校外学習に行くと、1 人の生徒が花を指さしながら「水仙！」と大声で叫びます。「正解！」と私は答えます。別の生徒は曲がり角の市街標示を読んで、「ノース・ステート通り」と言います。生徒たちは目をしっかりと見開き、全てを吸収していきます。2005 年、ニューハンプシャー州マンチェスターでルーテル社会事業団［LSS］が開催した「世界難民デー」の式典で、ソマリア系バンツー族の難民が言っていました。「私たちは子供のように、新しいことを何でも覚えていく」と。

私の生徒たちは子供ではありませんが、生徒にとっては未経験のことが多いのです。私は彼らのツアーガイドで、生徒たちが周囲の環境を歩いて調べているのを観察していると、彼らにとって何が大切で価値があるかが私にも分ってきます。また、彼らが何に居心地のよさを感じるかについての理解も深まります。

私は 2005 年から、新米国人、つまり LSS の支援を受けている難民を教えています。けれども、私が難民の窮状や定住について関心を持ち始めたのは、それよりずっと前にさかのぼります。1980 年代半ば、米国移民史の授業で、私は難民の正式な定義を初めて教わりました。それは 1984 年、セントラルコネチカット大学で TESOL（英語を母語としない人たちへの英語教授法）の修士課程に在籍していた時のことでした。法律上の難民の定義、つまり、難民とは迫害を受け、あるいは迫害を受ける恐れがあると考える十分な根拠があって、故国を逃れた人々という定義が、その後数年間、私の頭から離れませんでした。

大学院生の時、私は ESOL のクラスを教えていました。生徒の何人かは難民で、ラオスの山岳地帯で半農・半遊牧で暮らしを立てているモン族の村の出身の若者でした。1975 年、ラオス内戦で共産勢力パテト・ラオ軍が勝利し、モン族の生活は危機にさらされました。彼らはメコン川を渡ってタイへ逃れ、難民キャンプで暮らした後、コネチカット州マンチェスターの教会が身元の引き受けを保証して米国に定住することになったのです。

私の大学の歴史学の教授は、学生全員に、コネチカット州にいる移民あるいは難民のグループを対象に 1 次調査を行うことを求めました。ベトナムとラオスへの米国の関与を思うと、なおさら、私はラオス難民についてもっと深く理解しなければならない責任を感じていました。ですから、自分が教

Courtesy of Max Bittle

Courtesy of Max Bittle

Courtesy of Max Bittle

えていた生徒とその家族が調査対象になったのは当然のことでした。私は彼らにインタビューして、故国脱出の痛ましい話を記録しました。

その後の数年間、私は難民と一緒に仕事をすることはありませんでしたが、その時に聞きとった祖国脱出と生き残りの話は忘れませんでした。モン族や他の難民グループについて、新聞や雑誌の記事を読み続けました。その間、私はマンハッタンに引っ越し、ユニオン神学校で神学修士号を取得した後、ニュージャージー州へ移り、米国聖公会のニューアーク教区で働きました。

2005年、都会のニューアークから田舎へ引っ越そうと、夫と私はニューハンプシャー州コンコードへ移りました。コンコードに着く前に、ジャーナリストをしている私の姉が、ルーテル社会事業団（LSS）の支援を受けニューハンプシャー州に定住した難民グループについての一連の記事を転送してくれました。私はTESOL（英語を母語としない人への英語教授法）の修士号を持っていたし、難民の窮状も気にかけていたので、LSSのESOLクラスで教える教師の仕事に応募しました。採用されて、2005年3月から成人の生徒を教え始めました。

それ以来、多くの難民を教えてきました。難民の出身地は、リベリア、ソマリア、コンゴ民主共和国、ブルンジ、イラク、アフガニスタン、クロアチアなどさまざまです。現在の生徒は主にブータンからの難民です。今受け持っている生徒は30人ですが、一時は75人を受け持ったこともありました。教えたのは初級と中級の英語学習者、それに大学教育を受けたことのある生徒です。

どのクラスを教えていても、言語の学習法として最も効果が高いのは、現実の世界でその言語を使って生活すること、新しい環境にどっぷり身を浸すこと、新しい友人関係をつくること、新たに住む地域社会の一員となることだと分かりました。教師として、私は生徒を教室の外へ連れ出して、英語を覚えさせ練習させます。校外学習の引率は私の仕事の大きな部分を占めています。地元の公園へ行って野球のやり方を教えたり、ニューハンプシャー州の州議会議事堂を訪問して中を見たり州政府について学習したりしました。校外学習では、私も生徒と一緒にコンコードの繁華街でウィンドーショッピングをしたほか、公共ラジオ放送局、スーパーマーケット、書店、青空市場、バス乗り場、ニューハンプシャー博物館など数多くの場所を訪れました。ある公園へ行った時には、その後のクラスでその校外学習について写真入りの作文が書けるように、希望者を募って記録を取ってもらいまし

（左上）校外学習で、新しい英単語やコンコードの町のことを生徒に教えようと興味深い場所を指さして説明するヤング（中央）

（左中央）野球を教わる生徒たち。ヤングはESOLの授業で米国文化も教えている

（左下）その日の出来事を話すヤング（左）とドゥンゲル（右）。ドゥンゲルたち生徒にとり、「校外学習は教育の場であると同時に、新しい故郷となる町を知る機会になっている」

校外学習では生徒の誰もが活発になり、さまざまな場所について熱心に学びました。友人の１人は、町のことがいろいろと分かる校外学習は大変役に立つ、と先生に言いました。彼はさらに、賃貸住宅やさまざまな種類の店、レストランなど多くの物を目にしたが、難民にとって非常に重要な情報が得られると話しました。私も校外学習は非常に大切だと感じています。生徒のほとんどは校外学習が好きで、極めて前向きに捉えていました。

校外学習は教育の場であると同時に、新しい故郷となる町を知る機会になっています。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

Courtesy of Max Bittle

カピル・ドゥンゲル

た。中級レベルのカピル・ドゥンゲルがその日の記録係になりました。別の生徒が写真係を引き受けてくれました。校外学習は英語の勉強だけでなく、生徒が新しい環境に慣れ、社会にうまく溶け込むのにも役立ちました。

難民である生徒が新たな「場所の感覚」を身につけるのを手助けする仕事には、これまでずっとやりがいを感じてきました。米国へ来る難民は、住み慣れた場所を一度ならず追い立てられた経験から、自分がいる場所について多少戸惑いを感じていることが多いのです。彼らは初めのうちは混乱していますが、地域の人々や仲間の生徒、新しい環境などについてもっとよく知れば、そして、米国人としてより一般に認められた人々が難民である彼らについて理解を深めるにつれ、そうした混乱状態は収まってきます。時間がたてば、難民の大半は落ち着いた気持ちになり始めます。生徒たちは校外学習で、自分が後にした故郷と自分を結び付ける物を何か見つけることがあります。最近、地元の百貨店に行った際、ブータン人の生徒たちが、輝くばかりの笑顔を浮かべながら、チーズ売り場の前で立ち止まりました。ショーウィンドーにウシの実物大の模型が展示されていたのです。彼らの多くが故国では農業を営んでいたため、家畜は彼らにとって懐かしい思い出なのです。彼らの多くはヒンズー教徒で、ウシを神聖な動物としてあがめています。昨年の夏、近くの公園へ校外学習に出かけた時には、１人の生徒が薬草を見つけました。それは、彼女が以前にいたネパールの難民キャンプで薬を調合するのに使っていたのと同じ種類の薬草でした。また、ある衣料品店では、ブータン人の男性が故郷でサリーを作るのに使っていた生地があることを指摘しました。町の住民は立ち止まり、手を振り、ほほ笑みかけ、こうした新しい米国人について質問しました。新しく住み着いた町で故郷と同じような物を見つけたり、他の米国人と出会ったりすることが、新しい生活への順応に役立つのです。

私が教えている難民にとって、各種の支援サービスと連絡をとるとか、書類に必要事項を記入するといった実務的な事柄を習得することだけが、新生活を快適にするのではありません。それよりも重要なのは、彼らが周囲の環境や自分が属する新しい米国人のコミュニティーの他の構成員との間に築くつながりです。そのつながりがあれば、喪失感や故国への思慕の気持ちが残っていても、難民の生活はうまくいくでしょう。こうした難民のために私ができることはそう多くはありませんが、その恩恵は難民だけでなく、私自身も受けているのです。新たに米国人となった友人たちのおかげで、私は私自身のいる世界とつながり、それを新たな視点から見るようになっているからです。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

米国の難民保護政策推進に一役買う かつての児童難民

Courtesy of Ken White

応用人類学の博士号を持つホア・チャンは、20 年間にわたり難民・移民問題に取り組んできた。2004 年からは、米国国務省で難民政策に取り組んでいる

ホア・チャンはまだ幼い子供だった 1975 年、ベトナムを離れ米国に定住した。現在は、米国国務省の人口・難民・移住局で難民政策に取り組んでいる。

問：米国へ着いたのはいつですか。
ホア：1975 年 11 月、ベトナムを出てから 9 カ月後に、ジョージア州アトランタに着きました。そこに私の家族は定住したのです。私は 7 歳でした。

問：家族全員で来たのですか。
ホア：一番上の姉と一番上の兄を除く家族全員で来ました。この兄と姉は祖父母と一緒にベトナムに残りました。当時、祖父母は 80 代後半で、私たちと一緒に米国まで長旅をするよりも自分の国で死にたいと言っていました。

問：ベトナムからの旅はどんなでしたか。
ホア：ひどい混乱状態だったことを思い出します。米国に到着するまでに何カ月もかかりました。まず、私たちが住んでいたクイニョンを離れたのが 1975 年の 2 月で、翌月カムラン湾の米海軍基地にたどり着きました。4 月にフーコックを発ち、グアムやウェーク島の米空軍基地などの軍事基地内にあった難民キャンプ数カ所でしばらく過ごした後、米国に到着しました。当時の米国の政策は、難民の流入によって特定の州が過度の負担を強いられるのを避けるため、米国の全ての州にベトナム難民を定住させるというものでした。難民手続きセンターが 4 カ所に開設されており、私たちは 1975 年 8 月にアーカンソー州フォートチャフィーに送られ、そこからアトランタへ移動して定住したのです。

問：米国へ着いた時、アパートを探してくれたり、町を案内してくれたりしたのは誰ですか。
ホア：私たちを引き受ける保証をしてくれたのはアトランタ

の第一長老派教会でしたから、最初はこの教会の人たちの世話になりました。私たちの住まいや働き口を見つけて生活を安定させてくれ、それから、私やきょうだいたちが学校に通えるよう手助けしてくれました。

問：米国を自分の新しい祖国だと感じ始めたのはいつですか。それとも、いつも自分は来訪者に過ぎないと感じていましたか。
ホア：両方です。子供は自分が感じたことを正直に言いますから、学校ではいつも他の子供たちから嫌がらせを受けていました。私は怒りっぽいところがあるので、よく反撃したものです。小学校のころはいつも問題を起こしていました。そのうちに、ESL［第２言語としての英語］のプログラムが設けられ、きょうだい２人や他の国から来た子供たちと一緒にそのクラスに入りました。それで、私たちは英語をより体系的に学べるようになりました。また、お互いの心を通じ合わせることができるようになり、それが通常クラスへの移行に役立ちました。

問：新しい文化に適応するのは難しかったですか。
ホア：私は好奇心の強い子供だったので、いつも物事を探ろうとし、いろいろな騒ぎを起こしていました。挑発されればそれに正面から立ち向かいました。私はまた非常にふざけるのが好きで、小さな子供がするようなことをしては、トラブルになっていました。私の年上のきょうだいたちや両親が体験した困難は、もちろん、一家に影響を与えました。米国に来てから数年後に、父はひどく体の具合が悪くなりましたが、私たちは米国の医療制度を理解できず、どうしたら良いのか分かりませんでした。父はがんと闘いながら頑張りましたが、やがて亡くなりました。あの時期、私たちはずっと苦しい思いをしていました。

問：あなたとあなたの家族を助けてくれたのはどのような人たちでしたか。
ホア：私の ESL の先生がとてもよく助けてくれました。彼女は思いやりがあり、理解のある人でした。彼女が結婚してアトランタを離れることになり、ひどく動揺したことを覚えています。長老派教会の人たちも大変助けになってくれ、私たちのニーズに対応してくれました。

問：あなたを支援してくれた人とあまり理解してくれなかった人がいて、その間に隔たりがあったと思いますが、それについてはどうやって折り合いをつけたのですか。
ホア：人は皆、さまざまな人生観を持つ人たちと出会いながら、また世界のさまざまの地域の出身者を相手にしながら、大人になっていきます。私のやり方は、助けになってくれる人たちを当てにして信頼すること、助けを求めるタイミングを見分けること、そして、いつも争ってばかりいるわけにはいかないことを理解することでした。

問：あなたがアトランタで歓迎されていると感じさせてくれた人や、あなたと家族をくつろいだ気持ちにさせてくれた人はいましたか。
ホア：とても興味深いことですが、誰かの家へ夕食に招かれたという記憶は全くありません。最も助けになってくれたのは教会の人たちでした。私たちは日曜日ごとに彼らと会いました。すると、彼らは私たちの家まで来てくれ、必要なものがそろうよう世話をしてくれました。大変有り難いと思いました。仕事探しも手伝ってくれました。父と母は、ベトナムでしていた仕事と比べれば、［単純な］サービス関係の仕事をするしかありませんでした。ベトナムでは、母は自分で事業をしていました。また、父は南ベトナム政府と米国政府関係の仕事をしており、それが幸運にも早い時期に私たち一家が避難できた理由の１つになりました。

問：あなたと家族が米国市民になったのはいつですか。
ホア：時期は別々でした。私の場合は 1991 年でした。

問：その時はどんな気持ちでしたか。
ホア：宣誓のためアトランタの裁判所へ行くと、集まった人たち１人１人に小さな米国国旗が渡され、それを掲げるよう言われました。会場はとても素晴らしい雰囲気でした。世界各地の出身者が多数いて、中には、英語を一言も話せないような人もいました。70 代後半の人たちもいました、最高の気分でした。父がベトナムでの闘いに深く関わっていたこと、そのため、避難の際に手助けを受けたのを思い出します。安全な場所に来て、正式に米国市民になるまでに至ったこと、それは素晴らしい気持ちでした。

問：大人になっていく過程で、自分が米国人だと考えたことはありますか。
ホア：自分が米国人だと考えたことは一度もなかったと思います。というのも、まず、米国人のアイデンティティーは１つだけではありませんし、また、ベトナム人のアイデンティティーも１つだけではないからです。私はたくさんのベトナム系米国人や他の民族集団、それに難民や移民のグループと仕事をしましたが、自分も自分の周辺のものも時間とともに変わるため、自分が誰であるかを定義するのはたいへん難しいのです。

問：あなたの現在の生活との関連で言えば、あなたはあなた自身をどう考えていますか。ベトナム系米国人ですか、ベトナム人ですか、それとも何か別のものですか。
ホア：ベトナム系米国人ということだろうと思います。

問：なぜ国務省で働こうと決めたのですか。
ホア：高校時代、ホームレスの保護施設でボランティアを始め、そこの子供たちの世話をしました。また、私が在籍した高校にはコミュニケーションに重点を置いたマグネット・プログラム（訳注：ある分野に特化したカリキュラム）があり、

©AP Photo

1975 年のサイゴン陥落後、ベトナムのダナンで、カムラン湾へ向かう避難船に必死の思いで乗り込もうとする南ベトナムの人々。チャンは家族と共にカムラン湾へ避難し、最終的にはジョージア州アトランタに定住した

私はドキュメンタリー写真に関心を持つようになりました。高校卒業後は、1988 年「アメラジアン帰還法」が成立した時、難民支援活動に関わるようになり、米国で定住が可能な難民のための活動を始めました。いくつかの難民の家族と密接に協力し、その家族たちと一緒にドキュメンタリー写真の展示を行いました。それは、彼らが自分たちの経験を伝え、抱えている問題を公にするための方法の１つでした。

大学や大学院に在籍中も、難民支援などの権利擁護活動を続けました。人類学の博士号を取った後、AAAS［米国科学振興協会］の外交フェローシッププログラムのことを知りました。このプログラムに応募して採用されましたが、私としてはワシントン DC にいるのは短期間に過ぎないだろうと考えていました。国務省の人口・難民・移住局（PRM）を希望したところ、幸いにも PRM との間で話がつきました。ここにいるのは１年か２年のつもりでしたが、PRM の仕事とそこで非常に献身的に働いている人たちには本当に感心しています。彼らは世界各地の紛争の犠牲者に人道上の保護と援助を提供するため、本当に一生懸命働いており、いろいろなことを実現しようと絶え間なく努力しています。

問：あなたは、自分自身が元難民であったことから、難民の人たちに何か特別なことをしてあげられると考えましたか。
ホア：私がそうだったように、彼らも状況が分からないため、苦労していると考えました。彼らの役に立ちたいと思いました。彼らに必要があれば何でもアドバイスする、医師のところへ連れて行く、彼らの生活が少しでも楽になるようにできる限りのことをする、といったことです。私なら、自分の家族の経験を踏まえて、彼らの気持ちが理解できる、彼らの母語で意思の疎通ができる、子供たちを連れだして何か面白いことをさせたり、ブラブラさせたりすることができる、と感じました。

問：米国における難民支援事業は、あなたが初めて米国に来た時と比べて改善していると思いますか。
ホア：私たちが着いた時も援助はありましたが、もちろん、長年にわたって難民の流入を経験したこともあって、関係機関や団体の数は増えており、元難民のスタッフも多くなっています。［難民の支援に当たる］要員は以前よりも多様になり、経験や洞察力を持った人が加わっており、私たちが着いた 1975 年と比べると間違いなく大きな前進だと思います。もちろん、1975 年に来た人たちでも、まだ苦しい状況にある人もいて、現在の制度の下で何とかうまく乗り切って行こうとしています。

問：米国の生活や文化で、あなたの成功に特別な影響を及ぼしたと考える側面はありますか。もし別の国に定住していたとしたら、米国と同じようなチャンスを得たと思いますか。
ホア：確かに、ここ［米国］にはさまざまなチャンスがあり、難民であるかどうかにかかわらず、自分の目標達成に向けて努力することも、困難や障害をたくみに切り抜ける方法を見つけることも、個人の責任です。もちろん、克服することが大変難しい構造的・制度的体系が根底にあり、そのために必要な年数は人によって大きく違うかもしれません。けれども、チャンスがあることは確かであり、米国以外では多くの人にとってそれほどチャンスはありません。比較は難しいですが、もし私がスウェーデンなどに定住していたとして、そこでどのような試練やチャンスを与えられたとしても、私としては何とかして試練に耐えて乗り切る方法を探します。それが私の考えであり、その考えを私らしく頑固に守ります。

問：元難民という経歴を踏まえて、難民政策に関するあなたの取り組みを説明してください。
ホア：私たち［PRM］が対象にしている、弱い立場にある人々のための人道上の保護と援助をめぐる多数の問題について交渉し解決を図ることの難しさ、また持続的な解決策あるいは一時的な保護のための選択肢を実現するために最善を尽くすことの難しさを自分は理解していると私は信じています。そして、私たちがどれほど熱心に唱道しても、目標に到達できない時は、そのことが心配で夜も眠れなくなります。とても大変ですが、複雑な状況を解決することが可能になることもあり、その時は非常に報われた気持ちになります。もう一度言いますが、人生と同じように、全力を傾注して目標達成のために精いっぱい闘うことが大切です。勝つ時もあれば負ける時もありますが、決して諦めないことです。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

参考資料

難民に関する出版物、ウェブサイト、映像

論文・記事

Refugees' Stories

Beah, Ishmael. *A Long Way Gone: Memoirs of a Boy Soldier*. New York: Sarah Crichton Books, 2007.

Bernstein, Nina. "First Day in America, First Sight of Snow." *New York Times* (February 11, 2010). *http://query.nytimes.com/gst/fullpage.html?res=9B02E0D9103FF932A25751C0A9669D8B63*

Celeste, Erika. "From Job Skills to People Skills: Learning U.S. Ways." *National Public Radio* (July 6, 2010). *http://www.npr.org/templates/story/story.php?storyId=128116102*

Gourevitch, Phillip. *We Wish to Inform You That Tomorrow We Will be Killed with Our Families: Stories from Rwanda*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1998.

Horowitz, Joseph. *Artists in Exile: How Refugees from 20th Century War and Revolution Transformed the American Performing Arts*. New York: Harper Collins, 2008.

Jolie, Angelina. *Notes from My Travels: Visits with Refugees in Africa, Cambodia, Pakistan, and Ecuador*. New York: Pocket Books, 2003.

Kase, Aaron and F.H. Rubino. "Refugees Settling in Philadelphia: Refugees Seek New Beginnings in the City of Brotherly Love." *Philadelphia Weekly* (March 2, 2010). *http://www.philadelphiaweekly.com/news-and-opinion/cover-story/Refugees-settling-in-Philadelphia.html*

Kidder, Tracy. *Strength in What Remains: A Journey of Remembrance and Forgiveness*. New York: Random House, 2009.

Kim, Mike. *Escaping North Korea: Defiance and Hope in the World's Most Repressive Country*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2008.

Marton, Kati. *The Great Escape: Nine Jews Who Fled Hitler and Changed the World*. New York: Simon & Schuster, 2006.

Ogata, Sadako. *The Turbulent Decade: Confronting the Refugee Crises of the 1990s*. New York: W.W. Norton & Company, Inc., 2005.

Simple, Kirk. "Bhutan Refugees Find a Toehold in the Bronx." *New York Times* (September 25, 2009). *http://www.nytimes.com/2009/09/25/nyregion/25bhutan.html?_r=1&fta=y*

Ung, Luong. *First They Killed My Father: A Daughter of Cambodia Remembers*. New York: Harper Collins, 2000.

Wiesel, Elie. *Night*. New York: Hill & Wang, 1960.

Policy Resources

Loescher, Gil. *Beyond Charity: International Cooperation and the Global Refugee Crisis*. New York: Oxford University Press, 1993.

Loescher, Gil and Ann Dull Loescher. *The Global Refugee Crisis: A Reference Handbook*. Santa Barbara, CA: ABC-CLIO, 1994.

Loescher, Gil, James Milner, Edward Newman, and Gary Troeller, eds. *Protracted Refugee Situations: Political, Human Rights and Security Implications*. Tokyo, Japan: United Nations University Press, 2008.

Martin, Susan Forbes. *Refugee Women*. Lanham, MD: Lexington Books, 2004.

Steiner, Niklaus, Mark Gibney, and Gil Loescher, eds. *Problems of Protection: The UNHCR, Refugees, and Human Rights*. New York: Routledge, 2003.

Fictionalized Accounts

Díaz, Junot. *The Brief Wondrous Life of Oscar Wao*. New York: Riverhead Books, 2007.

Eggers, Dave. *What is What: The Autobiography of Valentina Achak Deng. A Novel*. San Francisco: McSweeney's, 2006.

Hosseini, Khaled. *The Kite Runner*. New York: Riverhead Books, 2003.

Mengestu, Dinaw. *The Beautiful Things That Heaven Bears*. New York: Riverhead Books, 2007.

ウェブサイト

FY 2010 Report to Congress on Refugee Admission
米国の 2010 年度難民受け入れ上限案および米国への難民受け入れプロセスを明示している。
http://www.whitehouse.gov/the-press-office/presidentialmemoranda-93009

International Committee of the Red Cross (ICRC)
武力紛争の犠牲者を支援する人道的組織。
http://www.icrc.org

International Organization for Migration (IOM)
難民や国内避難民を支援するため、各国政府、NGO などと協力する国際機関。
http://www.iom.int/jahia/jsp/index.jsp

United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR)
UNHCR は難民保護と亡命・定住支援の国際的取り組みを主導し連携する。
http://www.unhcr.org
以下も参照のこと
United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR): The Global Appeal 2010-2011
http://www.unhcr.org/ga10/index.html

United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees in the Middle East (UNRWA)
パレスチナ自治区、レバノン、ヨルダン、シリアにいるパレスチナ人の保護と支援を行う機関。
http://www.unrwa.org/

U.S. Department of State Bureau of Population, Refugees, and Migration (PRM)
PRM は本国への帰還・地元社会への融合・米国定住を通じて、世界中の難民、紛争犠牲者および無国籍者に援助および持続可能な解決策を提供する。PRM は米国の人口・移住政策の促進も行っている。
http://www.state.gov/g/prm/

U.S. Refugee Admissions Statistics
米国難民受け入れ計画の下で米国に受け入れられた難民の地域別数に関する正確な情報。
http://www.wrapsnet.org

映像資料

In This World (2002)
http://www.imdb.com/title/tt0310154/
Director: Michael Winterbottom
概要：パキスタンに住む若いアフガン難民がロンドン亡命を求めて危険な旅に出る。

Lost Boys of Sudan (2003)
http://www.lostboysfilm.com/
Director: Megan Mylan and Jon Shenk
概要：2 人のスーダン難民が、ケニアそして米国へと逃れていく過程を追ったドキュメンタリー。Independent Spirit Award 受賞。エミー賞 2 部門ノミネート作品。

North Korea — Shadows and Whispers (2000)
http://www.journeyman.tv/8988/documentaries/shadows-and-whispers.html
Director: Kim Jung-Eun
概要：人里離れた中国北東部山岳地帯で撮影されたこのドキュメンタリーは、中国に逃れる北朝鮮難民が直面する困難を紹介する。

Rebuilding Hope (2009)
http://www.rebuildinghopesudan.org/
Director: Jen Marlowe
概要：3 人の南部スーダン難民が祖国に戻る旅を追う。家族や友人たちと再会し、昔住んでいたコミュニティーを助ける方法を見つける姿を描くドキュメンタリー。

The Split Horn: Life of a Hmong Shaman in America (2001)
http://www.pbs.org/splithorn/index.html
Director: Taggart Siegel
概要：米国に定住したラオス難民のパジャ・タオと家族の生

活。シーゲル監督は17年以上にわたり、シャーマンのパジャ・タオと妻と13人の子供たちの生活を記録した。

War Child (2008)
http://www.warchildmovie.com/
Director: Christian Karim Chrobog
概要：スーダン内戦で戦った元少年兵のエマニュエル・ジャルの物語。ジャルは現在アフリカ各地に希望と平和のメッセージを広めることに献身しているヒップホップの新進スター。

米国国務省は、上記資料の内容・入手可能性について一切の責任を負わない。インターネットリンクは2010年5月現在、全て有効であった。

米国大使館　広報・文化交流部

アメリカンセンターJapan
アメリカンセンター・レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒064-0821　札幌市中央区北1条西28丁目　米国総領事館内
Tel: 011-641-3444

アメリカンセンターJapan
〒107-0052　東京都港区赤坂1-1-14　NOF溜池ビル8階
Tel: 03-5545-7431

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒530-8543　大阪市北区西天満2-11-5　米国総領事館ビル7階
Tel: 06-6315-5970

福岡アメリカン・センター・レファレンス資料室
〒810-0001　福岡市中央区天神2-2-67　ソラリア・パークサイドビル8階
Tel: 092-733-0246

在沖縄米国総領事館・広報文化課レファレンス資料室
〒901-2104　沖縄県浦添市当山2-1-1
お問い合わせはオンライン質問箱をご利用ください
http://go.usa.gov/TCsP

米国大使館のウェブサイト

米国大使館　http://japanese.japan.usembassy.gov/

アメリカンセンターJapan　http://AmericanCenterJapan.com/

レファレンス資料室　http://usinfo.jp/